

長野県飯山市旭町遺跡群

# 北原遺跡 IV

1985・5

飯山市教育委員会

長野県飯山市旭町遺跡群

# 北原遺跡 IV

1985・5

飯山市教育委員会

# 序

飯山市教育委員会

教育長 浦野昌夫

北原遺跡は昭和53年に県営圃場整備事業が実施された際に一部発掘調査が行なわれましたが、今回、その東側の部分に統合小学校（泉台小学校）が建設されるのに伴ない発掘調査をしたもので、飯山南高校教諭の高橋桂先生を団長にお願いして調査団を編成しました。

発掘作業は昭和58年10月23日に開始されましたが時期的に遅かったうえに冬将軍の到来が早く天候が不順であったため作業は難行し悪戦苦闘の連続で11月24日、予定の約40%を調査して打ち切れ残りは翌年度に実施される事になりました。

翌59年は7月22日から作業が開始され、天候に恵まれた事もあり順調に進み9月7日に終了させる事ができました。

この2年間、団長をはじめ調査員各位並び長期間、熱心に発掘作業をされた作業員の方々に深甚なる敬意と感謝の念を捧げるものであります。

調査の結果、平安時代の鍛冶炉址等貴重な遺構、遺物が検出され、北原遺跡の重要性が更に解明されました。

終りにこの報告書が埋蔵文化財に対する理解を一層深める上に役立つ事を祈念して序といたします。

昭和60年3月25日

# 例 言

1. 本書は、飯山市立泉台小学校建設に伴う旭町遺跡群北原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 旭町遺跡群北原遺跡は、長野県飯山市大字旭字北原5366番地等に所在する。
3. 旭町遺跡群北原遺跡は、昭和53年度に県営圃場整備事業に伴う調査（北原遺跡1979、北原遺跡発掘調査報告書1980）および昭和55年度に実施した範囲確認調査（北原遺跡Ⅲ1981）を実施しており、本報告を北原遺跡Ⅳとして報告するものである。
4. 発掘調査は、飯山市教育委員会が主体となり、昭和58年10月23日～11月24日および昭和59年7月22日～9月8日にかけて実施した。調査会組織は第Ⅱ章第1節に記した。
5. 遺物の整理は、高橋桂団長以下調査員が共同して行ない、執筆については分担して行ない、目次に氏名を記した。なお、十分な討議に基づいていないため、若干の不統一な部分がある。
6. 発掘調査及び報告書作成にあたっては以下の諸氏に御指導をいただいた。記して感謝申し上げる。  
中島庄一（多摩市教育委員会）、大原正義（君津都市文化財センター）、太田文雄（松戸市立第五中学校）、今井正文（桶川市教育委員会）
7. 本書の編集は望月静雄が行ない、高橋桂が総括した。



# 目 次

序

例言

## 第Ⅰ章 環 境

第1節 自然的環境……………(高沢秀徳)……………1

第2節 歴史的環境……………(常盤井智行)……………4

## 第Ⅱ章 経 過……………8

第1節 調査に至る経過……………(小川恵一)……………8

第2節 調査経過……………(望月静雄)……………10

第3節 層 序……………(望月静雄)……………13

## 第Ⅲ章 遺 構……………(高沢秀徳)……………15

第1節 縄文時代の遺構……………15

第2節 弥生時代の遺構……………15

第3節 平安時代の遺構……………17

1、土壇 2、井戸址 3、掘立柱建築址

## 第Ⅳ章 遺 物……………34

第1節 縄文時代の遺物……………(望月静雄)……………34

第2節 弥生時代の遺物……………(常盤井智行)……………36

第3節 平安時代の遺物……………(常盤井智行)……………40

1、土器 2、その他の遺物

## 第Ⅴ章 考 察……………(望月静雄・高橋桂)……………51

第1節 土壇(鍛冶炉)について……………51

第2節 平安時代の土器編年について……………54

第3節 北原遺跡の歴史的背景について……………57

## 第Ⅵ章 結 語……………(高橋桂)……………59

付編

## 発掘参加者の記録

遺跡発掘に参加して…………… 笹川 大塚 勇……………64

発掘調査に参加して…………… 山口 岸田 義元……………65

遺跡掘りに参加して…………… 笹川 高柳 唱……………65

北原遺跡掘りの思い出	南条 岸田つね子	66
北原遺跡掘りに参加させて戴いた思い出	山口 岸田かつ江	67
遺跡発掘	南条 小沢 菊江	68
北原遺跡よさようなら	四ツ谷 宮本 鈴子	68
発掘調査に参加して	山口 岸田しづ子 (熊雄)	68
北原遺跡参加の思い出	山口 岸田しづ子 (要佐)	69
遺跡掘り	笹川 宮本 君代	70
柳原小学校児童作文集		
北原いせきの発掘をして	阿部千夏	71
〃	北川裕之	72
〃	荻原克志	72
〃	前沢歩美	73
〃	和田さおり	74

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1:50000)	2
第2図 周辺遺跡分布図 (1:25000)	5
第3図 調査区 (1:2000)	11
第4図 グリット設定図 (1:1000)	12
第5図 層序 (1:40)	13
第6図 遺構全体図 (1:300)	14
第7図 縄文・弥生時代の土坑 (1:40)	15
第8図 弥生時代第1号住居址 (1:60)	16
第9図 第43・45・46・48・49・50号土坑 (1:40)	18
第10図 第44・47・52号土坑 (1:40)	19
第11図 第51・53・54・55・56・57・58・59号土坑 (1:40)	21
第12図 第60号土坑 (鍛冶炉) (1:20)	22
第13図 第61・62・63・65・66・67・68号土坑 (1:40)	23
第14図 第64号土坑遺物分布図 (1:50)	24
第15図 第64号土坑 (1:50)	25
第16図 第3・4号井戸址 (1:40)	27

第17図	第5号井戸址 (1:40) .....	28
第18図	第6号掘立柱建築址 (1:60) .....	29
第19図	第7号掘立柱建築址 (1:60) .....	30
第20図	第8号掘立柱建築址 (1:60) .....	31
第21図	第9号掘立柱建築址 (1:60) .....	32
第22図	縄文時代の遺物 (1:3) .....	35
第23図	弥生時代の遺物 (1:4) .....	37
第24図	石器 (1:2) .....	39
第25図	平安時代の土器1 (1:4) .....	41
第26図	平安時代の土器2 (1:4) .....	43
第27図	平安時代の土器3 (1:4) .....	44
第28図	平安時代のフイゴ羽口・鉄滓 (1:3) .....	46
第29図	平安時代の木製品・石製品 (1:2) .....	47
第30図	平安時代の鉄製品 (1:2) .....	48
第31図	北原遺跡遺構全体図 (1:400) .....	49
第32図	第19・40号土坑(鍛冶炉) (1:40) .....	52
第33図	千葉県花前製鉄址(千葉県文化財センター1982より) .....	53
第34図	土師器環形土器 (1:4) .....	56

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧(昭和60年3月現在) .....	7
第2表	掘立柱建築址計測表 .....	33

## 写真図版目次

図版1	1 旭町遺跡群北原遺跡周辺地域航空写真(昭和47年撮影)
図版2	2 遺跡遠景(西より)
	3 遺跡近景(北より)
図版3	4 遺構全体図(南より)
	5 遺構全体図(東より)
図版4	6 弥生第1号住居址遺物出土状態

図版 4	7	弥生第 1 号住居址
	8	弥生第 1 号土塚
図版 5	9	第 44 号土塚
	10	第 50 号土塚
	11	第 53 号土塚
	12	第 54 号土塚
	13	第 57 号土塚
	14	第 64 号土塚
図版 6	15	第 60 号土塚 (鍛冶炉)
	16	第 60 号土塚 (鍛冶炉)
図版 7	17	第 6 号掘立柱建築址
	18	第 7 号掘立柱建築址
	19	第 8 号掘立柱建築址
図版 8	20	第 3 号井戸址
	21	第 4 号井戸址
	22	第 5 号井戸址
図版 9	23	23-5
	24	23-9
	25	23-14
	26	23-8
	27	弥生時代の土器
図版 10	28	土師器坏形土器 (1 : 4)
	29	土師器坏形土器
	30	墨書土器
	31	須恵器坏形土器
	32	平安時代の土師器 (甕形土器)
	33	平安時代の須恵器
図版 11	34	石器
	35	フイゴ羽口
図版 12	36	木製品
	37	鉄製品
	38	鉄滓

} 挿図番号に一致

# 第 I 章 環 境

## 第 1 節 地理的環境

北原遺跡の存在する飯山盆地は、四方を死火山に囲まれた内陸盆地で、当該遺跡はその南西隅にある。四方の死火山は、東側の毛無山（けなし、標高1650m）、西側の斑尾山（まだらお、同1382m）、南側の高社山（たかやしろ、同1352m）、北側の鍋倉山（なべくら、同1288m）を指すが、高社山を除く三山はいずれも溶岩の粘度が高いトロイデ型を呈している。高社山は南北両斜面が裾野をひき、稜線が見事なコニーデ型火山で、高井富士、と呼ばれ、親しまれている。

長野県の最北端に位置する飯山盆地は、山梨、埼玉、長野の三県境にある甲武信岳（同2483m）に源を発する千曲川（全長 367km）によって東西に二分されている。さらに、西側も南北に横たわる長峰丘陵（ながみね）によって分断され、その西側を外様平（とぎまだいら）、東側を常盤平（ときわだいら）、千曲川以東を木島平（きじまだいら）と呼んでいる。

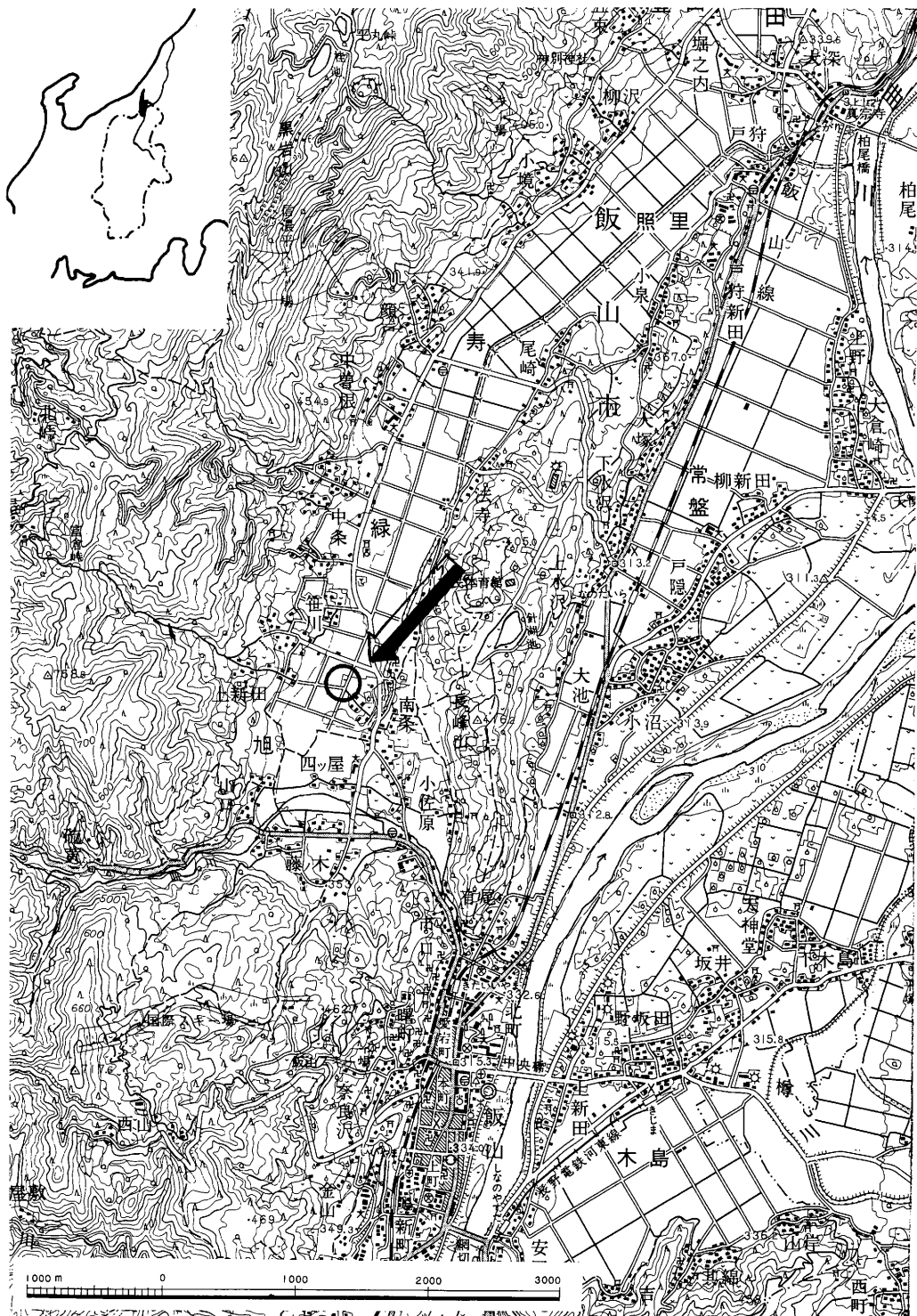
外様平の南端に南条（みなみじょう）という集落があり、その西隣が当該遺跡の北原地籍となっている。

盆地中央部が千曲川沖積氾濫原、周辺部は山地から流れ出る中小河川が扇状地を形成する。東の木島平では樽川扇状地、馬曲川（まぐせ）扇状地、外様平では斑尾山に源を発する皿川（さら）扇状地、笹川扇状地、滝沢川扇状地等々であり、これら扇端部には集落が立地している。

斑尾山と鍋倉山を結ぶ西側山地が海拔ほぼ1000mの関田山脈であり、新潟県との県境を構成している。関田山脈は第三紀層が中心であるため、軟弱な性質を持ち、浸食がいたるところでみられ、とくに遺跡地のの上流付近では谷と尾根が錯綜する複雑な地形を提供しており、崖崩れ、地滑りなどが多発することが特色といえる。

例えば、長野県内の上水内（かみみのち）や更級（さらしな）、北安曇（きたあずみ）、新潟県では頸城（くびき）地方なども同様の第三紀層地帯である。梅雨や台風の豪雨時、融雪時などが要注意時なわけである。

外様平は、東西1～1.5km、南北8km余りの細長い「く」の字形をしている。ここに柳原、外様、太田の旧三村があるわけだが、標高 350m 前後を保っている。扇状地が関田山脈山麓に多く分布しているため、隣の常盤平に比べ、ゆるやかな凸凹が各所にみられ、それぞれ田に畑にと有効に利用されてきた。



第1図 遺跡位置図 (1 : 50000)

外様平と常盤平を分けている長峰丘陵をみると、南北約8kmの長さをもつ小高い丘で、紡錘型をなして、最も巾の広いところが1km程ある。頂上は最高で標高416m、北へいく程低くなっている。盆地底部より50~100m高く、また遺跡が多く分布していることも特徴の一つである。

長峰の成因は褶曲によって盛り上がった凸地で、背斜部に当たるといふ。地層の傾斜をみると、西側で60度西傾斜、東側で20度~40度東傾斜を示し、地層の走向が北15度~20度東とされている。

この褶曲凸地は、善光寺平まで千曲川に沿って順に、長峰、長丘丘陵、豊野若槻の丘、長野城山等と続いており、地層などが類似していることから、一連の褶曲活動によるものといえそうだ。

地層は第四紀洪積世に堆積した礫層、砂層、粘土層、火山岩屑等から成り、地表には腐植物を含んだ黒土、そして火山岩の風化した赤褐色のローム層が認められている。長峰の西裾野を北流している広井川は、外様平の肥沃土壌を形成したものであり、同平の主要水資源としての役割が大きい。

また、同地は関田山脈越えの富倉峠への分岐点としての役割を忘れてはならない。善光寺平から新潟県十日町に至る『十日町街道』が古来より開けている。飯山盆地に入って様々に枝道が分かれているが、とくに城下町飯山を経て、外様平の玄関口としての当地は中継地という重要点であった。富倉峠越えで運ばれてくる塩や魚等の海産物、長野からの内山紙、箕、菜種等物資の集積、分散の機能を果たしていた。戦国時代には上杉謙信がこの富倉峠を何回も通って長野に入ってきたという。

### 気候

同地の気候の特色をみると、冬季は関田山脈から吹き降ろす北西季節風が強く、積雪が多い。また寒さも厳しい。夏季は日中と朝夕の温度差が大きいことなど、内陸性盆地型気候と裏日本型気候を併わせもっている。

## 第2節 歴史的環境 (第2図・第1表)

**旧石器時代** 柳原地区の人間の足跡は、古く旧石器時代に遡る。鶴巻・城ヶ端・針湖池で出土した刃器や彫器がそれを物語る。これらは約1～2万年程前のものである。

**縄文時代** 人々が煮炊きのできるうつわ「土器」を初めてもった縄文時代になると、人々の足跡はより多くより確実に認められる。城ヶ端遺跡は昭和44年に永峯光一氏によって発掘され、多量の表裏縄文土器が、穀摺石・石鏃とともにみつかった。この土器は縄文時代初頭の草創期におかれる。当期の土器の多量出土は全国的にみても珍しい。石器を共伴したことも草創期の文化を考える上で重要である。

続く縄文早期の遺跡は今のところ針湖池でしか確認されていないが、前期の遺跡は多い。代表的なのは、昭和27年に神田五六氏、飯山北高地歴部によって発掘された有尾遺跡で、径7mの円形プランをもつ竪穴住居跡1棟と多量の土器・石器が出土した。土器は半載竹管による施文が器体の上半部に三角形につけられるのを特徴としており、縄文前期の標式土器として有尾式と命名されている。

縄文中期も遺跡は多い。代表的なのは須多峯遺跡で、昭和40・41・45年と高橋桂氏によって発掘され、遺跡地北西部で多量の中期前葉の土器が出土した。この土器は北陸方面、特に新潟方面の影響が強いと指摘されている。千曲川や関田山脈を介した新潟との強い交流が想定できる。

このように柳原地区では縄文中期までの遺跡は多く確認されているが、縄文後、晩期の遺跡は今のところみつかっていない。これについては、奥信濃の縄文時代の遺跡は、中期までは丘陵ないし台地上にあるが、後、晩期には瑞穂宮中・桑名川東原・西大滝・野沢温泉村東大滝など千曲川にのぞむ段丘上に立地を変えていることから、狩猟中心であった生活から、千曲川を遡上する鮭・鱒などを対象とする魚撈中心の生活に転換したためだ<sup>注1</sup>という指摘がある。

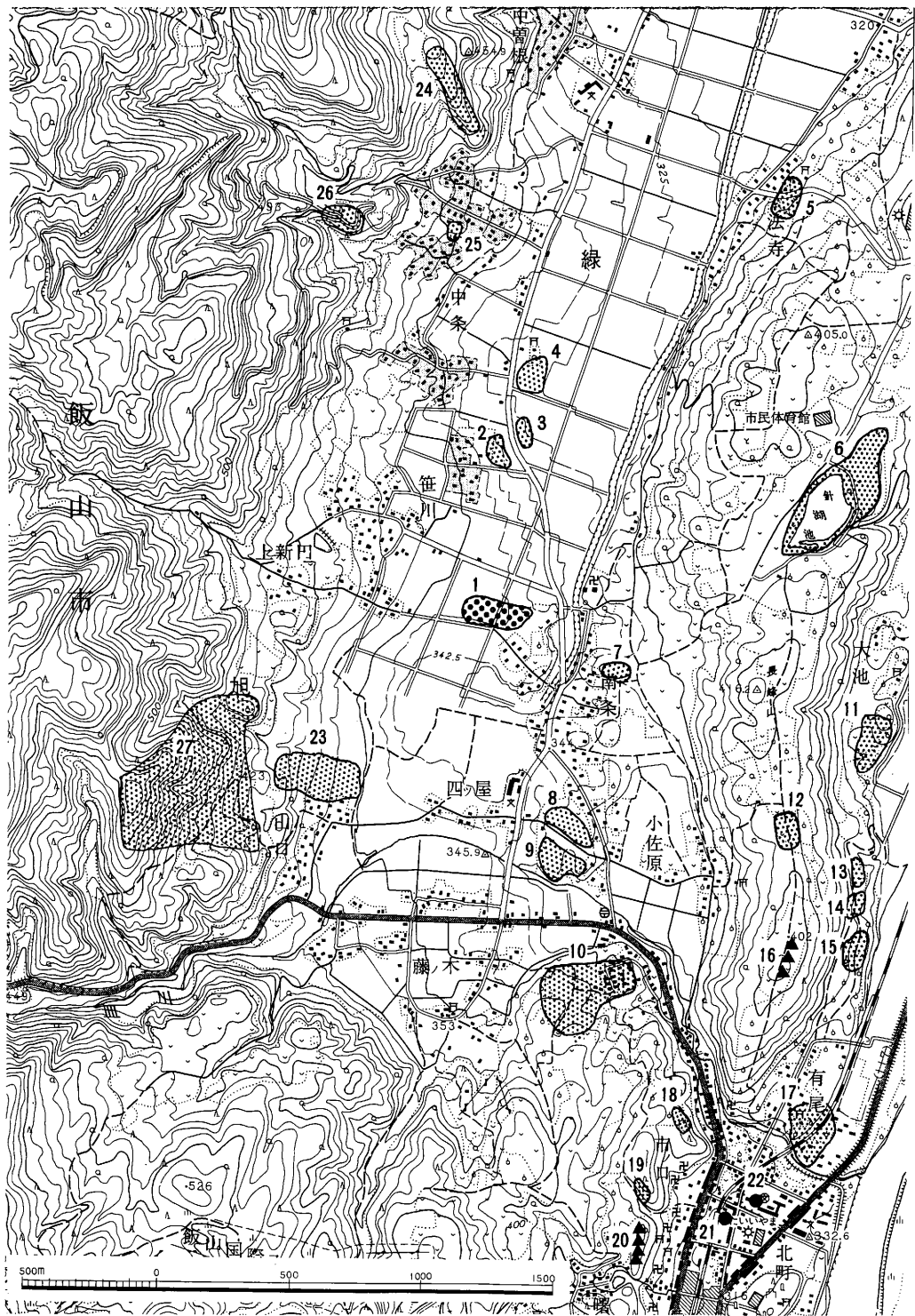
**弥生時代** 今から2300年前、紀元前3世紀、大陸から北九州に伝来した新しい文化「稲作」は、またたく間に西日本一帯に伝播した。この稲作を主たる生産手段とする、現代まで日本文化の基調となった文化の始まりが弥生時代である。

飯山に稲作が伝播したのは北九州に遅れること約300年、弥生時代中期中葉であった。

柳原を含む外様平は飯山では最も早く稲作を受け入れた、弥生文化の中心地である。千曲川の支流の広井川・皿川が形成した湿潤低地を臨む徴高地や長峰丘陵に、当北原遺跡を始め多くの遺跡が形成されている。

弥生中期の代表的遺跡として当北原、鍛冶田遺跡があり、円形プランの竪穴住居跡と、中野市栗林遺跡出土土器を標式とし、沈線文と縄文を特徴とする栗林式土器が検出されている。





第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 25000)

弥生後期の代表的遺跡として、城ヶ端・須多峯遺跡がある。城ヶ端遺跡では方形プランの竪穴住居跡と、長野市箱清水遺跡出土土器を標式例とし、不連続な楕円文と赤色塗彩土器を特徴とする箱清水式土器が出土している。須多峯遺跡では、稲作の共同作業を指揮し、自然神に五穀豊穡を祈る祭主＝首長の出現を示す、鉄釧・ヒスイ勾玉などの貴重品を副葬した方形周溝墓2基がみつ<sup>注2</sup>かっている。

**古墳時代** 原則として一人の最高首長を葬るための巨大な墳丘をもつ墓「古墳」が造られた時代が古墳時代である。長峰丘陵は飯山市有数の古墳密集地である。その多くは10m級の小型円墳だが、長峰丘陵北部の茶臼山1号墳は径40mの大円墳であり、同丘陵南端の有尾1号墳は長さ37mの前方後円墳である。両墳の存在は外様平北部と南部に、両墳被葬者を頂点とする地域集団が成立したことを想定させる。両墳の年代はこれまで古墳時代中期以降と考えられていたが、有尾1号墳については、立地と、その墳形が前方後円墳の疑いがあることから前期古墳の可能性が指摘<sup>注3</sup>されている。

また注意されるのは、今のところ長峰丘陵で確実な横穴式石室墳はみつ<sup>注3</sup>かいていない。

古墳時代の集落は、飯山市全体をみても確認されたものは極く少ない。ただし、多くの古墳の存在は、当期の集落の存在の証拠である。須多峯遺跡の弥生方形周溝墓の近くで検出された方形プラン竪穴住居跡は、古墳時代前期に編年される関東五領式期併行の柳町式土器を伴<sup>注4</sup>う。有尾遺跡は、古墳時代後半の鬼高期の土器が出土している。

**歴史時代** 古墳時代に続く飛鳥・奈良時代の遺跡は今のところ飯山地方ではみつ<sup>注4</sup>かいていない。本当に無いとすれば、大きな問題である。

平安時代には再び集落が数多く営まれる。代表的なものとして当北原・鍛冶田・別府原・有尾・黄金石上遺跡がある。特に鍛冶遺構を検出した当北原遺跡は、当地方の先進性を示すとともに、柳原の中心的村落であったことをうかがわせる。又、鍛冶田遺跡の土塚墓の発見は、平安時代の墓制を考えるうえで重要である。この平安時代における当地の発展の背景として、「常岩<sup>とこいわのまき</sup>の牧」と呼ばれる官営牧場の設定が指摘<sup>注5</sup>されている。

中世には当地に常岩氏・泉氏等の氏族が居たことが記録に記されているが、彼らの拠点と推定される山城や館跡が関田山脈東麓に点々と残されている。しかしその具体相については明らかでなく、今後の研究課題の1つである。

注1 高橋桂「柳原の古代文化」『柳原村誌』昭和45年

注2 高橋桂「北信濃須多ヶ峯弥生式墓墳調査略報」『考古学雑誌』51-3 昭和41年

同 「北信須多ヶ峯遺跡出土の弥生式遺物について」『考古学雑誌』52-3 昭和41年

注3 松澤芳宏「飯山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題」『信濃』35-3 昭和58年

注4 高橋桂・太田文雄「北信須多ヶ峯遺跡第二次発掘調査報告」『信濃』29-4 昭和52年

注5 飯山市教育委員会『長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡調査報告書』昭和55年

その他参考文献

長野県飯山北高等学校地歴部OB会『遺跡分布調査報告Ⅰ』昭和52年

飯山市教育委員会『長野県飯山市旭町遺跡群 鍛冶田』昭和55年

番号	遺跡名	時代	発掘
1	北原	縄文(前・中)、弥生(中)、平安	○
2	別府原	縄文(中)、古墳(後)、平安	○
3	笹川	縄文(中)	
4	布施田神社	平安	
5	法寺	弥生(中・後)	
6	針湖池	旧石器、縄文(草創・早・前)、弥生(中・後)、平安	
7	鶴巻	旧石器、縄文(前)	
8	鬼ヶ峯	弥生(後)、平安	
9	城ヶ端	縄文(草創・前)、弥生(中・後)	○
10	須多峯	縄文(前・中)、弥生(中・後)、古墳(前)	○
11	お茶屋	弥生(中・後)	
12	長峯	旧石器	
13	長者窪	縄文(早)、弥生(中)	
14	林子畑	古墳(中)、平安	
15	黄金石上	平安	○
16	有尾古墳群	前方後円墳1(長約37m)、円墳2	
17	有尾	縄文(前・中)、弥生(中・後)、古墳(中・後)、平安	○
18	ガニ沢上	弥生(後)	
19	大聖寺池	縄文(前)	
20	神明町裏古墳群	古墳状隆起4	
21	北飯山	縄文(前)	
22	北町	弥生(中)	○
23	鍛冶田	縄文(早)、弥生(中)、平安、中世	○
24	中条城	中世	
25	中条館	中世	
26	馬の峯城	中世	
27	山口城	中世	

第1表 周辺遺跡一覧(昭和60年3月現在)

## 第Ⅱ章 経 過

### 第1節 調査に至るまでの経過

昭和58年9月26日、西部統合小学校（仮称）建設予定地が北原遺跡内である事が判明したので文化財専門委員会を開催し協議した結果、記録保存を行なうために発掘調査を実施する事とし調査会を結成して行なう事になった。調査会のメンバーは調査会長に浦野教育長、副会長に武田教育次長、理事に佐藤政男氏をはじめとする6名の文化財専門委員と（仮称）西部小学校建設委員会長の高柳保人氏を決めた。又、調査団長には飯山南高等学校教諭の高橋桂氏に委嘱し、調査に教育委員会の望月静雄が専従した。

10月19日、文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出する。

10月22日、市役所において調査会及び調査団の結団式を行なう。会議において調査計画の細部にわたって協議を行ない発掘調査の日程を10月23日から11月25日までとする事等を決めた。また作業員については過去に経験のある地元柳原地区の方を15名程お願いする事とし、作業責任者を大塚勇氏にお願いした。

10月22～23日、調査準備として器材はこび、杭打ち、グリット設定、地形測量、テント設営を行なった。

10月23日、午後3時に発掘関係者が現場に集合して歛入式を行ない発掘作業の安全を祈った後第1日目の作業に入った。

11月24日、この日までに調査予定面積1000㎡のうち実施した面積は400㎡であったが、開始の時期が遅かった事と雪降り空を控え悪天候が続いたため作業が思いのほかはかどらず、これ以上続行する事は不可能と判断し、残りは翌年度に実施することとし打ち切る事になった。

59年7月18日 文化庁長官あて本年度分の埋蔵文化財発掘通知を提出する。

7月19日 文化財専門委員会において調査メンバーを昨年通りとする事とした他、新たに調査員に高沢秀徳、常盤井智行の2名を委嘱した。

7月22日、朝より調査準備として器材の運搬、テントの設営等を行ない、午後より作業を開始した。

午後4時より旭連絡所で発掘関係者が集合して、開始式を行ない調査の細部打合せをした後、全員で乾杯をし、発掘調査の安全と成功を祈った。

## 飯山市旭町遺跡群北原遺跡調査会（組織）

### 調査会名簿（昭和58・59年度）

顧問	小野沢静夫	（飯山市長）		
会長	浦野昌夫	（飯山市教育長）		
副会長	武田作之助	（飯山市教育委員会教育次長）		
理事	佐藤政男	（飯山市文化財専門委員）	斎藤二六	<sup>昭和58年度</sup> （飯山市文化財専門委員）
	高橋桂	（飯山市文化財専門委員）	弓削春穂	（飯山市文化財専門委員）
	上原幸夫	（飯山市文化財専門委員）	藤沢正平	（飯山市文化財専門委員）
	吉沢菊之進	<sup>昭和59年度</sup> （飯山市文化財専門委員）	山崎盈	<sup>昭和59年度</sup> （飯山市文化財専門委員）
	高柳保人	（泉台小学校建設委員会会長）		
事務局	小川恵一	（飯山市教育委員会社会教育係長）		
	望月静雄	（飯山市教育委員会社会教育係）		

### （調査団）

団長	高橋桂	（飯山南高等学校教諭）
調査員	望月静雄	（飯山市教育委員会）
	高沢秀徳	（飯山市瑞穂・昭和59年度）
	常盤井智行	（飯山市常盤・昭和59年度）

### （作業参加者）昭和58・59年度

大塚勇（作業員責任者）、岸田義元、高柳唱、大塚ふさ子、宮本君代、小島えつ、大塚富造、荒井金子、丸山豊雄、丸山長子、岸田つね子、小沢菊江、宮本鈴子、岸田しず子（要佐）、岸田しず子（熊雄）、鈴木くに子、北川平吉、岸田かつ江、北川三枝、岸田みどり、岸田とい子、月岡あい子、飯山北高等学校野球部、飯山市立柳原小学校（児童約120名）、上野松雄、宮沢邦彦、市川丹一、高橋逸郎、丸山幸子、高山恒夫、今井吉春、岸田文彦（以上、飯山市教育委員会事務局職員）

### （協力者・機関）

清水一洋、小湊清彦、丸山豊雄（以上、飯山市議会議員）、南條区（昭和58年 阿部長年区長、昭和59年 和田芳夫区長）、笹川区（昭和58年 高柳保人区長、昭和59年 高橋金次区長）、上新田区（昭和58年 中島村司区長、昭和59年 中島勤区長）、飯山市公民館柳原分館（荒井博美分館長）、井上慶成

## 第2節 調査経過

### 昭和58年度

発掘調査は10月23日(日)より開始した。当初は約30日の予定で取組んだが、奥信濃地方にあっては、すでに初雪の季節であり、常に途中で中止出来るような態勢で望まざるを得なかった。また、58年秋は異状降雨とも言うべき天候で、雨天の時が多く、例年ならばすでに終了している稲刈り作業も大型コンバインが田地に入らず、多くの水田は黄金色の稲穂が重たく垂れていた。

グリット設定は、昭和53年度に県営圃場整備事業に先立って実施した調査区に接しているため、同グリットで設定することにした。しかし、圃場整備事業時に設計した農道が設計変更があったため、結果的に若干前回のグリットと重複・誤差が生じた。ただ方向は同一である。したがって、グリット番号も前回のグリット番号を踏襲せず新たに番号を付した。

調査区は、学校建設予定地の西隅にあたる。昭和55年の範囲確認調査により、おおよその分布地区が判明しており、昭和53年の調査と併わせて楕円形に拡がるものと考えられる。

調査はA-1・2グリットより着手した。範囲確認分布調査時(昭和55年)のNo.1・4調査坑の地点である。土師器片等の遺物が若干出土したが、明確な遺構は確認できなかった。

10月27日には、E-1・F-1グリット調査において、E・1グリットより土壇を検出する。範囲確認分布調査において検出したNo.8坑出土の第1号土壇である。

10月29日、みぞれ混りの風雨となる。11月1日より6日までは天候も落ちつき順調に進捗する。B-1・C-1グリットより土壇・柱穴群が密集して検出。焼土・粘土を併うようであり、鍛冶炉の可能性が考えられた。

11月9日までにA・B・C・D・E・F-1グリットおよびA・B-1～6グリットを確認面まで掘り下げ、遺構を確認する。

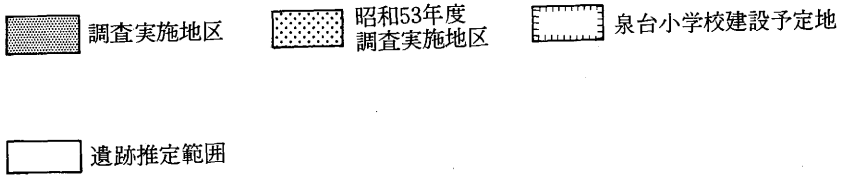
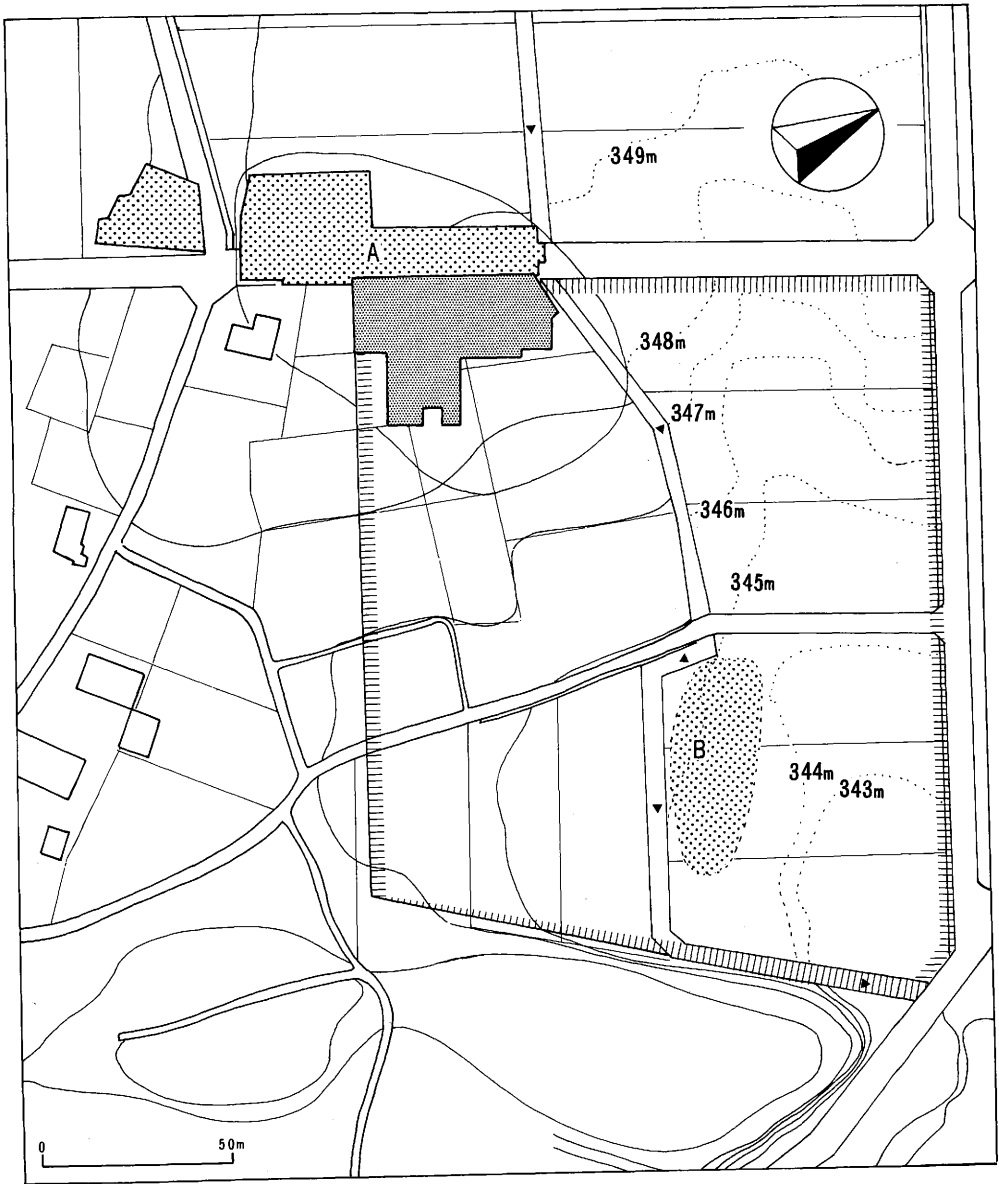
11月12日より18日までは、雨天の時が多く調査は難渋を極める。加えて、周囲の山々にまで降っていた雪が、18日には平地にも降り、調査地区でも数cmの積雪が認められた。

このため、これ以上の調査区の拡張は無理と判断し、検出した遺構のみ完掘することにした。出土土器の記録、実測作業は11月24日までかかり調査着手地区の遺構はすべて記録することができた。

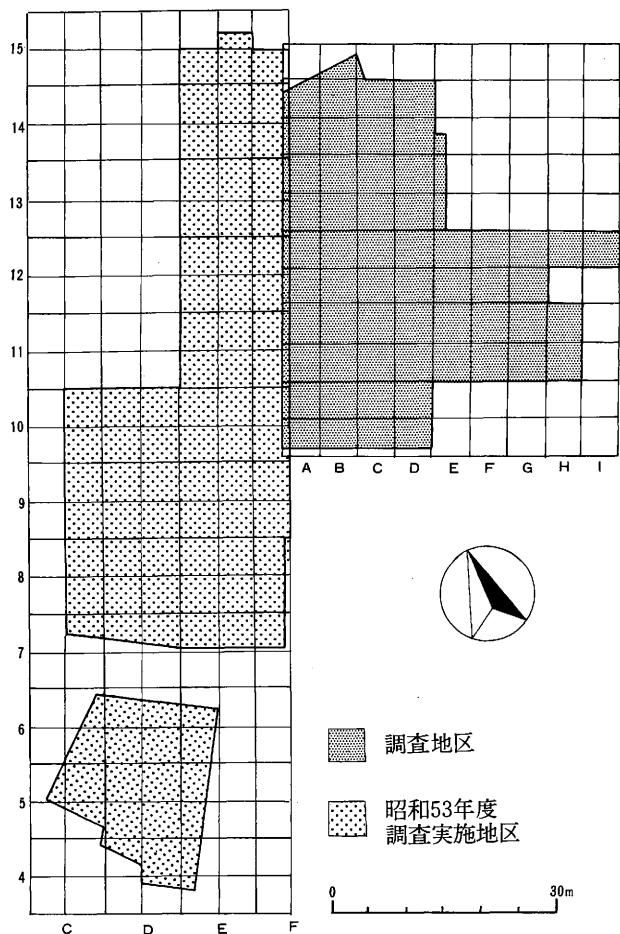
昭和58年度分の調査は、約400㎡を調査し、実働25日、延べ人員約230名。検出した主な遺構は、掘立柱建築址1、土壇8、井戸1、柱穴多数である。

### 昭和59年度

調査は、7月22日(日)より再開された。天幕設営、調査区の草刈り等を行なう。昨年度の調査区よ



第3図 調査区 (1:2000)



第4図 グリット設定図 (1:1000)

土したことから該時期の所産と考えられ、炉は確認されなかったが住居址と判断した。

8月17日までは作業を休み、18日より再開した。E～G-2～4グリットを精力的に調査し、土坑・柱穴等検出した。F-4グリットでは井戸址を検出し、底部付近より柄状の木製品が出土した。また、その付近の土坑より弥生期の小形壺が出土した。また、G・H-I・2グリットにおいて検出された小ピットは掘立柱建築址となることが判明した。

なお、調査が終了近くなって、統小建設予定地が、南へ約9m 拡がることになり、急遽拡張することにした (A～D-イ・ロ)。遺跡の範囲予測からすれば、中心地となる部分である。予測通り、鍛冶炉と思われる土坑等比較的密集して出土した。この拡張区の調査のために若干調査予定を延長して、9月7日に全部終了した。

2年間に亘る調査によって、また、昭和53年度の調査によって、北原遺跡のほぼ全容を明らか

りそれぞれ東・北へ拡張することとする。7月28日には市立柳原小学校児童約120名が体験学習として発掘に参加する。

7月31日(火)、B・C-7グリットより弥生中期の甕等まとまって出土。弥生時代の遺構の存在を推測する。

8月1日には、表土が厚く人力では無理と判断し、約15～20cmを重機によって剝土する。

8月10日までに、A～D-1～6グリットをⅢ層上面まで掘り下げたが、比較的遺構の検出は少なかった。弥生中期の土器片がまとまって出土した地区は、弥生 Loc 1 と仮称していたが、Ⅲ層上面において五本の柱穴が確認され、P4において赤色塗彩の壺が出土



にし得た。

### 第3節 層 序

旭町遺跡群北原遺跡の標準層序は第5図のとおりである。

遺跡は、大局的には笹川扇状地の扇端面に立地し、南北両側は凹地が形成され湿田状の水田となっている。すなわち、西側山地から供給された堆積物により、旧地形の凹地に厚く堆積したものであり、やや軟弱な粘性土を主体とし、砂質土を互層状にはさむ地盤により構成されている。以下に説明を加える。

I層 耕作土。耕作によってパサパサしている。

II層 黒色土である。粘着性がありしまりは良い。

III層 黄褐色粘土質層である。いわゆるローム層に似るが、砂質粘土を含み粘着性がある。

IV層 黄白色粘土層である。III層に似るが、小礫を含む。

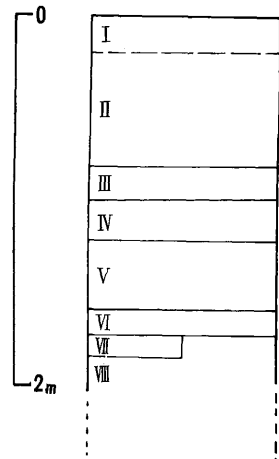
V層 褐色粘土質層である。III、IV層に比べ褐色味が強い。粘着性があり、しまりも良い。

VI層 黄白色粘土層である。全体的に白っぽい色調を呈す。

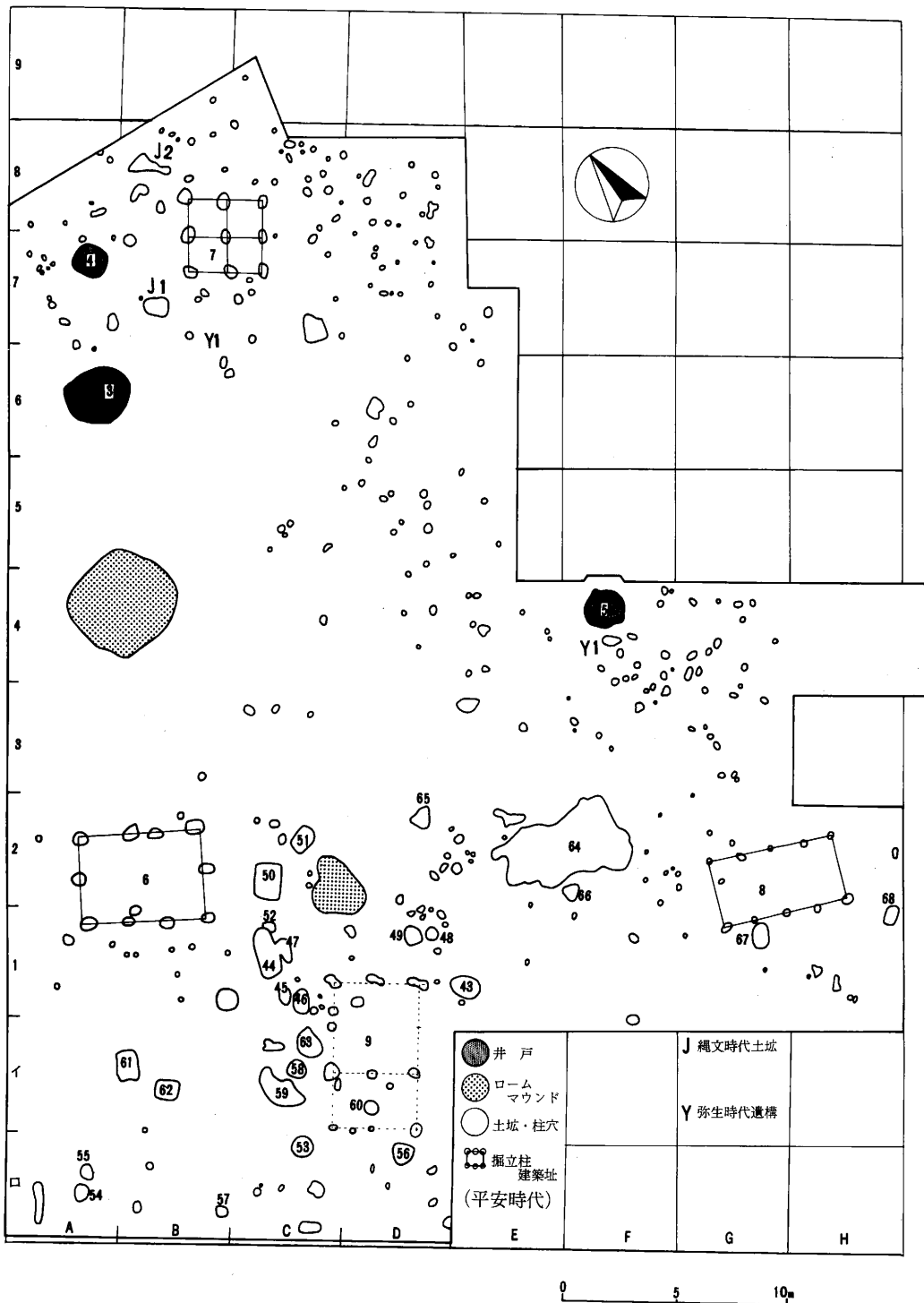
VII層 褐色粘土層。部分的に存在するようで、層厚も最大10cmと薄い。

VIII層 青白色粘土層。粘土質シルトである。

遺物包含層はII層中に検出される。縄文～平安時代において、生活面はさ程変化ないようであるが、第6号掘立柱建築址のセクションでは、掘り込みがI層との接点で認められた。したがって、平安時代の生活面（旧地表）は現地表面より15～25cm下位に求められる。ただ、調査においては、遺物が集中的に出土しない限り黒色土中における落ち込みは確認できないため、III層上面において確認・検出せざるを得なかった。



第5図 層序 (1:40)



第6図 遺構全体図 (1:300)

# 第Ⅲ章 遺 構

## 第1節 縄文時代の遺構

縄文時代に該当する遺構は、調査地区の北端部分で検出された土坑2基のみである。土坑周辺に検出されたピット群の一部あるいは縄文期の可能性がある。

### 第1号土坑（第7図・J S K 1）

B-7グリットに表出した。120×75cmの長方形を呈し、深さ概ね20cmでボート形底部をもつ。土坑周辺より縄文土器片が出土しているため本節に含めた。

### 第2号土坑（第7図・J S K 2）

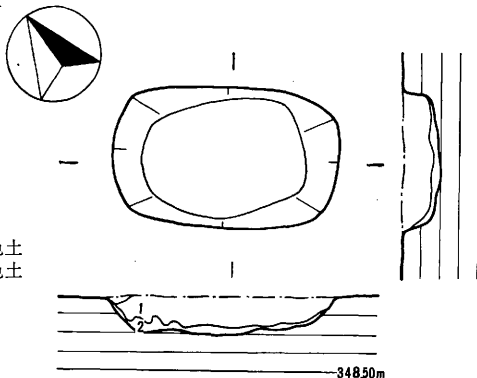
B・C-7・8の4グリットにまたがる弥生第1号住居址のすぐ北側に位置する。200×70cmのいわゆるサメ形を呈している。狭い部分が15cm、胸に当たる部分の上部から縄文土器底部片が出土している。

## 第2節 弥生時代の遺構

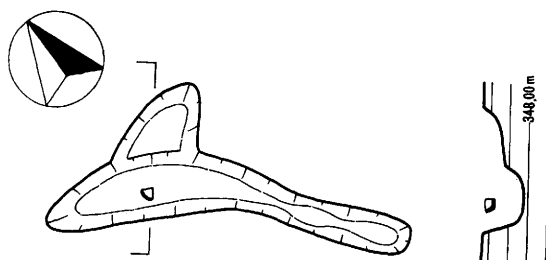
### 第1号住居址（第8図）

発掘調査区で最も整った形の弥生土器片（第23図及び写真図版9）が沢山出土した遺構である。B-7、C-7

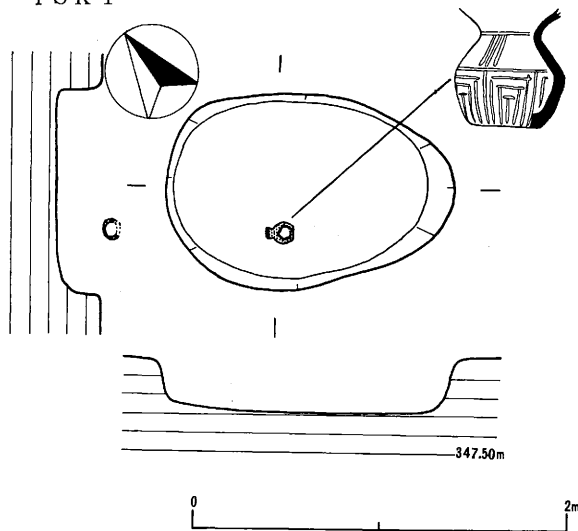
J S K 1



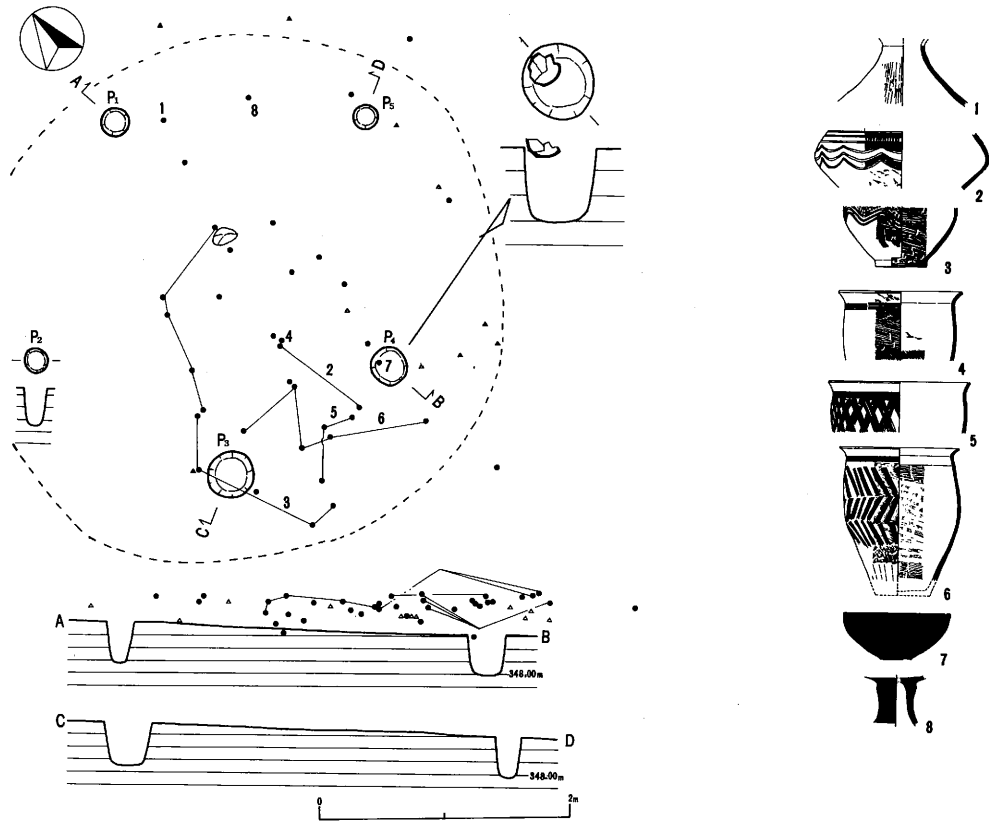
J S K 2



Y S K 1



第7図 縄文・弥生時代の土坑（1：40）



第8図 弥生時代第1号住居址 (1:60)

B-6の三区にまたがる五角形を成している。柱の跡と思われる穴の間隔が北から東へ順に200、200、150、175、200cmとなっており、深さ30~60cmある。直径が19~37cmである。基盤の黄褐色土から20~30cmの高さにおいて数多くの弥生土器片を回収した。

床面、炉は明確でなかったが、柱穴の配置からみて住居址と考えてよいであろう。

**第1号土坑 (第7図・YSK1)**

F-4グリット、第5号井戸址の南側に隣接している。155×105cmの平面卵形、深さ27cmで底部はほぼ平である。当土坑から小形壺(第23図14・写真図版9-25)が1個体おおむね完全な姿で出土した。

### 第3節 平安時代の遺構

#### 1 土 塚

##### 第43号土塚 (第9図・SK 43)

D-1、E-1グリットにまたがっており、対角線が115×120cmの楕円形、深さが25～28cmと一方が深い。土器14点出土している。昭和56年に実施した範囲確認調査で、確認しており、確認面において略完形土師器坏形土器を検出している。

##### 第44号土塚 (第9図・SK 44)

C-1グリットに表出した大小の長方形ピットが二つ重なり、さらにタンコブがくっついたような形のものである。小さい長方形のものが第47号土塚、さらにタンコブ状が第52号土塚だ。

第44号土塚は220×100cmの長方形を示し、最も深いところで63cm、中底で50cmとなっている。

小長方形の第47号土塚は100×106cmと上縁部が第44号土塚とつながっている。さらに第52号土塚70×40cmの小ピットである。当土塚は最も多くの土器が出土した。

##### 第45号土塚 (第9図・SK 45)

C-1グリット、第44号土塚のすぐ南側にある。83×60cmの楕円形、深さ13cmで上部において鉄製品が出土している。

##### 第46号土塚 (第9図・SK 46)

C-1グリットにあり第45号土塚の東隣がその位置である。隅丸長方形を示し北側半分が深く(25cm)浅い南側半分は10cmの深さ。110×67cmの大きさを持ち、底部6～8cmの厚さで焼土が出たことが特色である。土器も焼土上あるいは焼土中から10点以上表出されている。

##### 第47号土塚 (第44号土塚の項参照)

##### 第48号土塚 (第9図・SK 48)

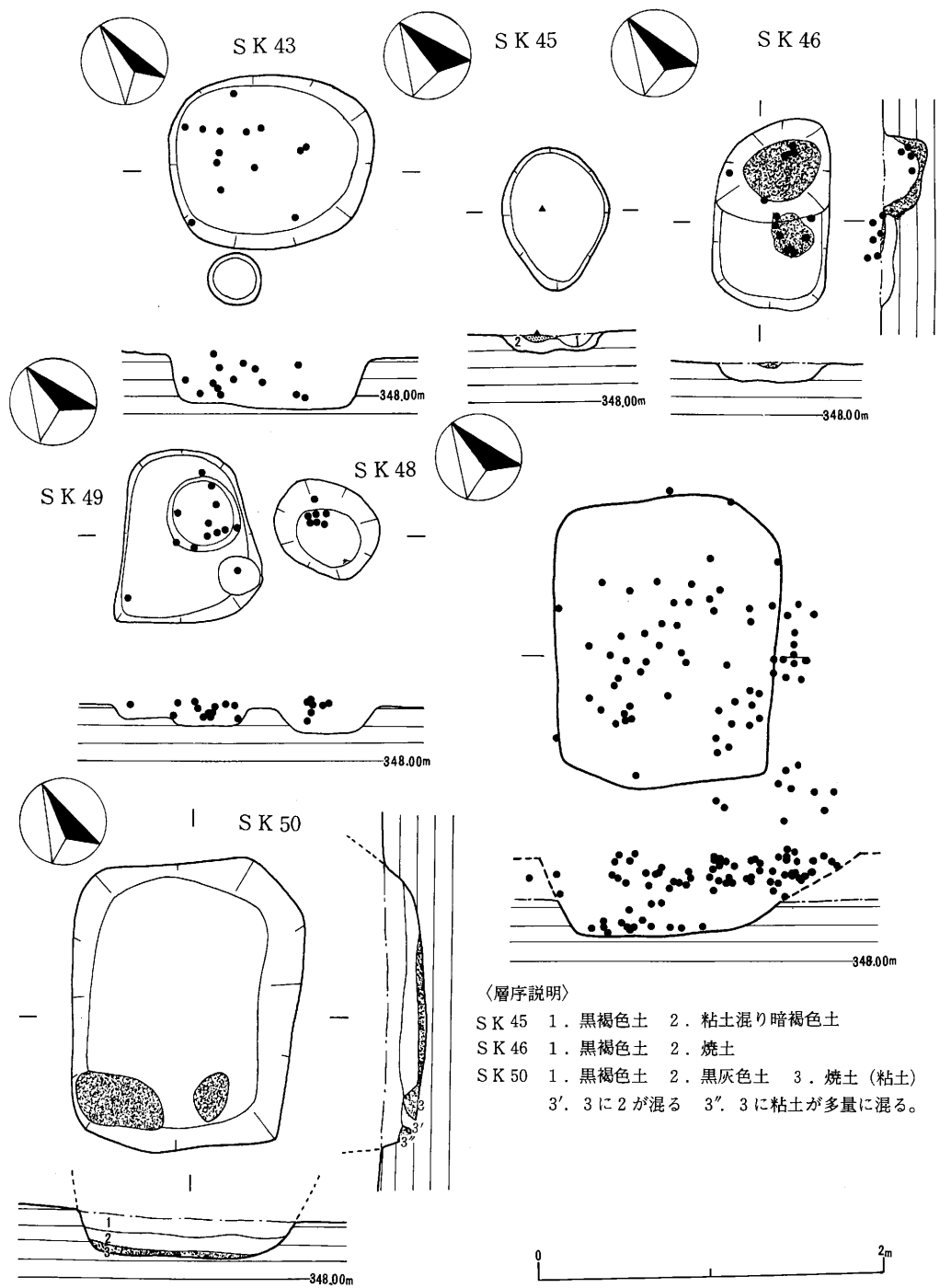
D-1グリットに位置する。65×60cmのほぼ円形で深さ17cm、土器7点ほど出土した。

##### 第49号土塚 (第9図・SK 49)

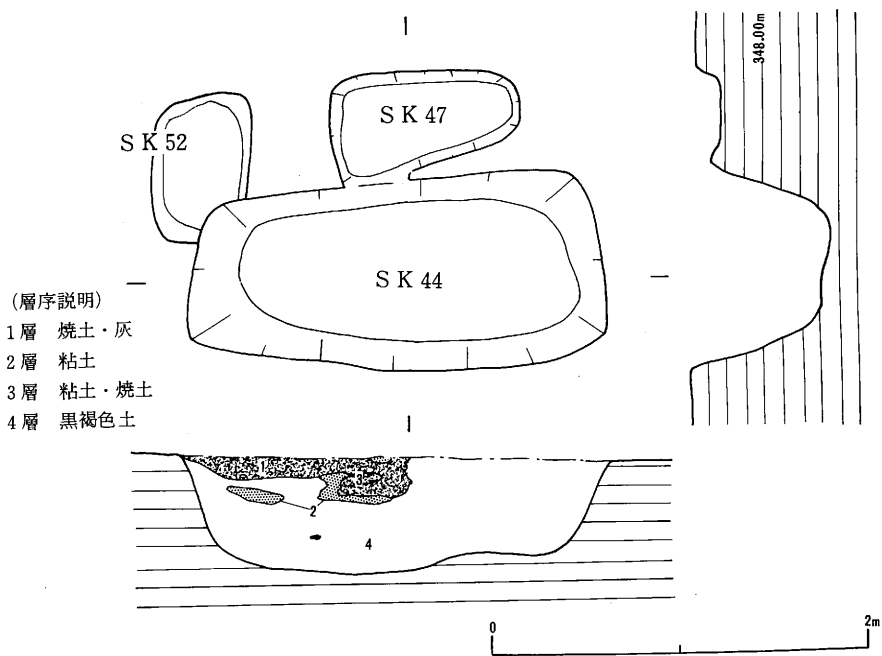
D-1グリットにあり第48号土塚の西側に位置する。110×105cmの隅丸台形、底部には46×43cmの塚があって、そこから集中的に土器が出ている。また直径20cmのピットが付随して、土器1片が出ている。

##### 第50号土塚 (第9図・SK 50)

C-2グリット、その両隣には掘立址(第18図参照)があり、当塚から土器数十点が出土している。130×165cmの長方形を示し、深さ25cmの底部には粘土が2カ所あった。今回調査で表出し



第9図 第43・45・46・48・49・50号土坑 (1:40)



第10図 第44・47・52号土坑 (1 : 40)

た遺構中3番目に大きい遺構である。

**第51号土坑** (第11図・SK 51)

C-2、第50号土坑の東隣に位置する。その南側にはローマウンドが検出されている。100×115cmの楕円形、土器は少なく7片の出土だった。深さが17cm。

**第52号土坑** (第44号土坑の項参照)

**第53号土坑** (第11図・SK 53)

C-1口に位置するが、C-1イに一部かかる。110×120cmの概ね円形である。深さ57cmある。当土坑も土器が集中的に出土した。

**第54号土坑** (第11図・SK 54)

A-1口、75×74cmのやや長方形を示し、深さ6cmのきわめて浅いものである。底部より20cm高い所から土器が出ている。

**第55号土坑** (第11図・SK 55)

A-1口、第54号土坑の東隣にある。くずれた円形を示し、70×67cmで、表出した土坑中では中型である。深さ16cmあり、底から21cm高い場所から鉄製品が出ている。

**第56号土坑** (第11図・SK 56)

D-1口に位置し、羽口や鉄滓が多く出土した遺構の南隣にあるものの出土遺物なし。125×102cmのゆがんだ円形、深さ12cmと、大きい割合に浅い土坑だった。

**第57号土坑** (第11図・SK 57)

B-1口、35×37cmのほぼ方形で粘土と小さい石が上部にあり、石の周辺に土器が3片出土した。深さ37cmとなっている。

**第58号土坑** (第11図・SK 58)

C-1イにあって86×76cmの大きさで、底部がほぼ円形だ。土器2片出土した。

**第59号土坑** (第11図・SK 59)

C-1イ、第58号土坑の西隣にある。237×123cmの長楕円の変形である。表出した土坑中で2番目の大きさだが、土器その他遺物の出土はなし。深さ28cmとなっている。

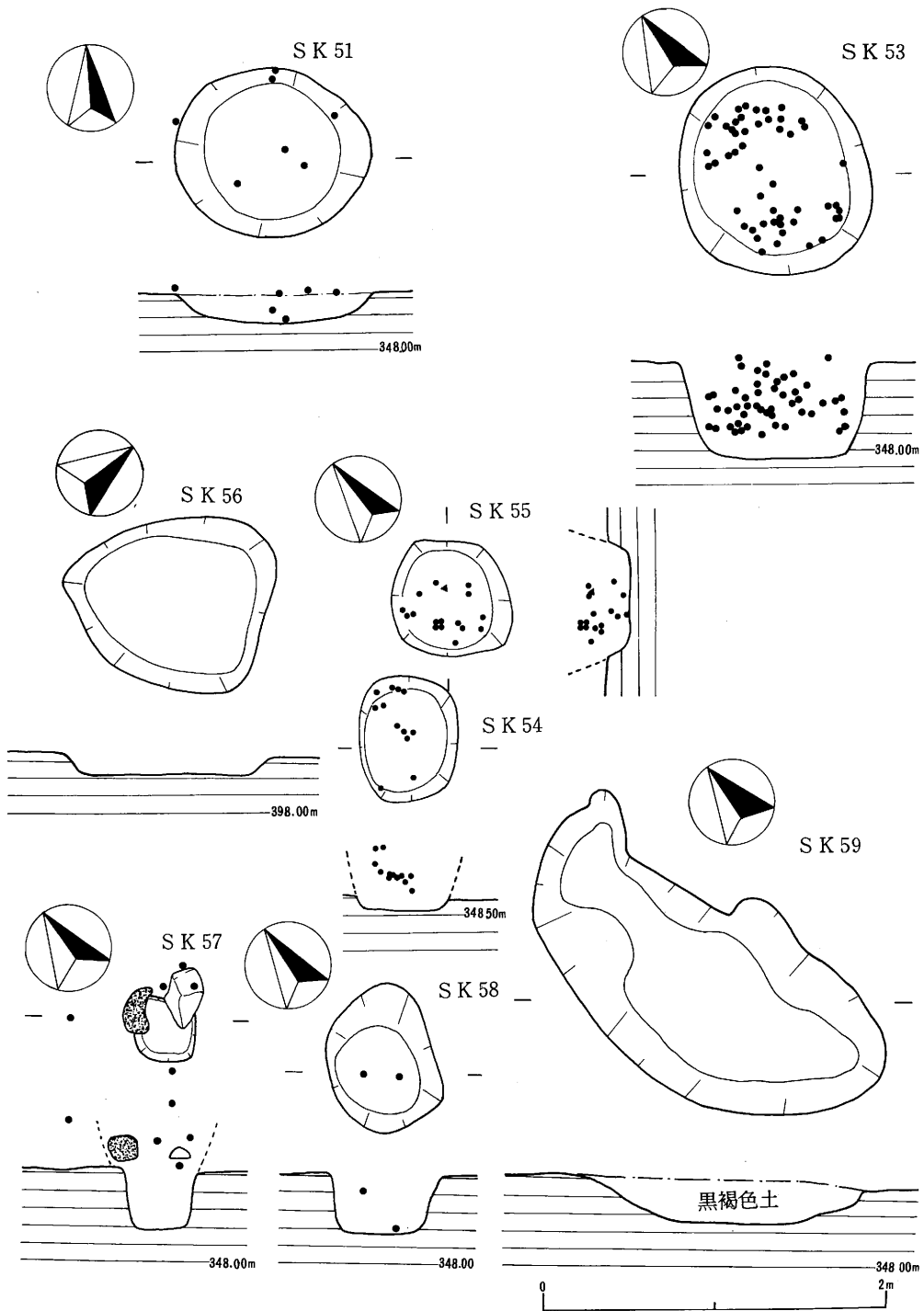
**第60号土坑** (第12図)

D-1イ、63×57cmの大きさで底部のが深く掘り込まれている。最も深い所で41cm、中段底で23cmある。当土坑において羽口、鉄滓、土器などが灰色粘土に混って沢山発見され、最も興味を引いた土坑である。すぐ北隣には焼土の小山があったりで、後述する竪穴遺構とともに調査に一番気を遣ったものである。

**第61号土坑** (第13図・SK 61)

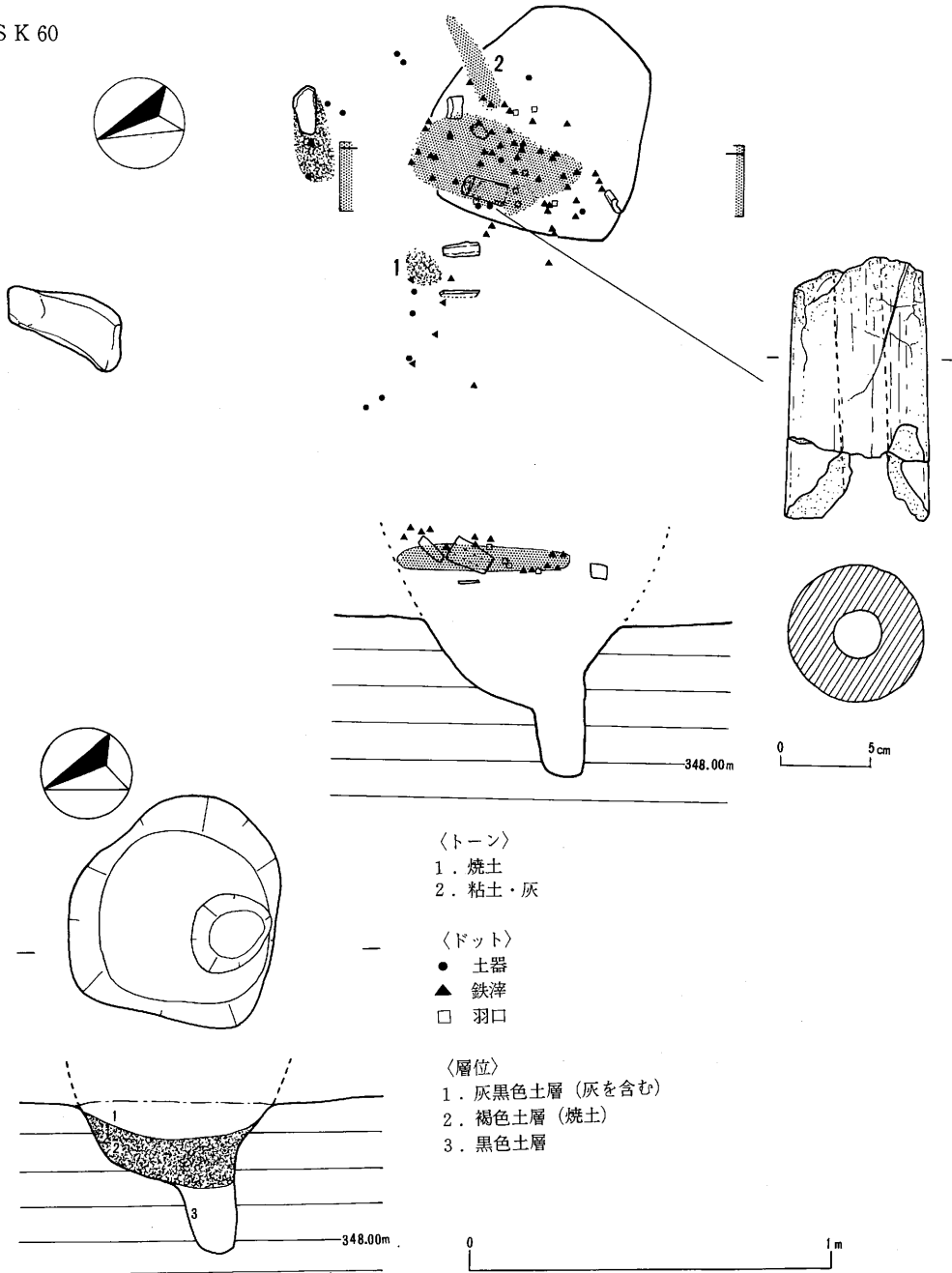
A-1イとB-1イに半分ずつまたがっており、137×97cmの長方形の大きさで土器5片みつか





第11図 第51・53・54・55・56・57・58・59号土坑 (1:40)

S K 60

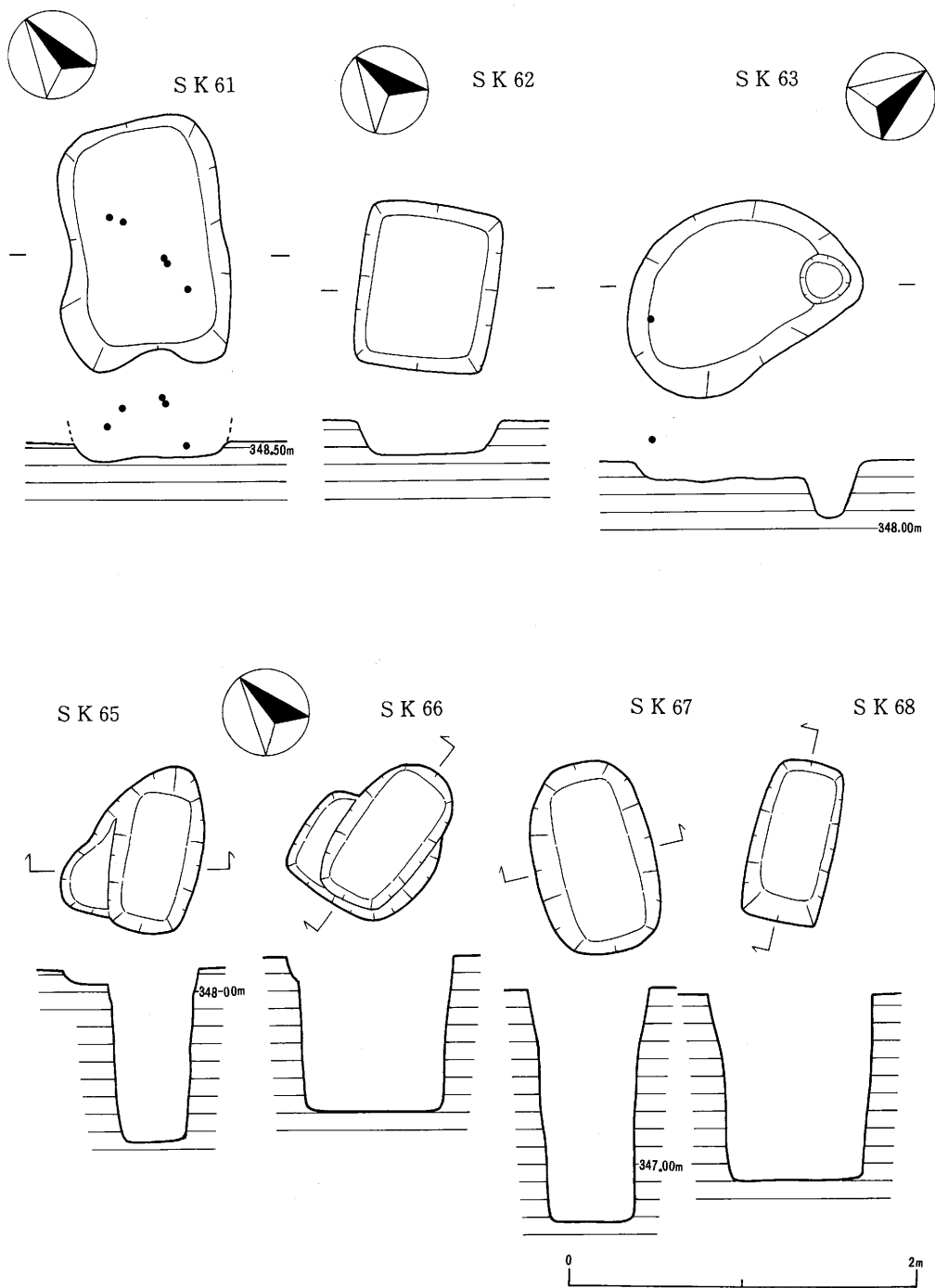


〈トーン〉  
 1. 焼土  
 2. 粘土・灰

〈ドット〉  
 ● 土器  
 ▲ 鉄滓  
 □ 羽口

〈層位〉  
 1. 灰黒色土層 (灰を含む)  
 2. 褐色土層 (焼土)  
 3. 黒色土層

第12図 第60号土坑 (鍛冶炉) (1 : 20)



第13图 第61·62·63·65·66·67·68号土坑 (1:40)

っている。深さが最深部で10cmと浅い。

**第62号土坑** (第13図・SK 62)

B-Iにあってほぼ長方形を呈している。大きさ80×97cmで深さ20cm程のものである。出土遺物はなし。

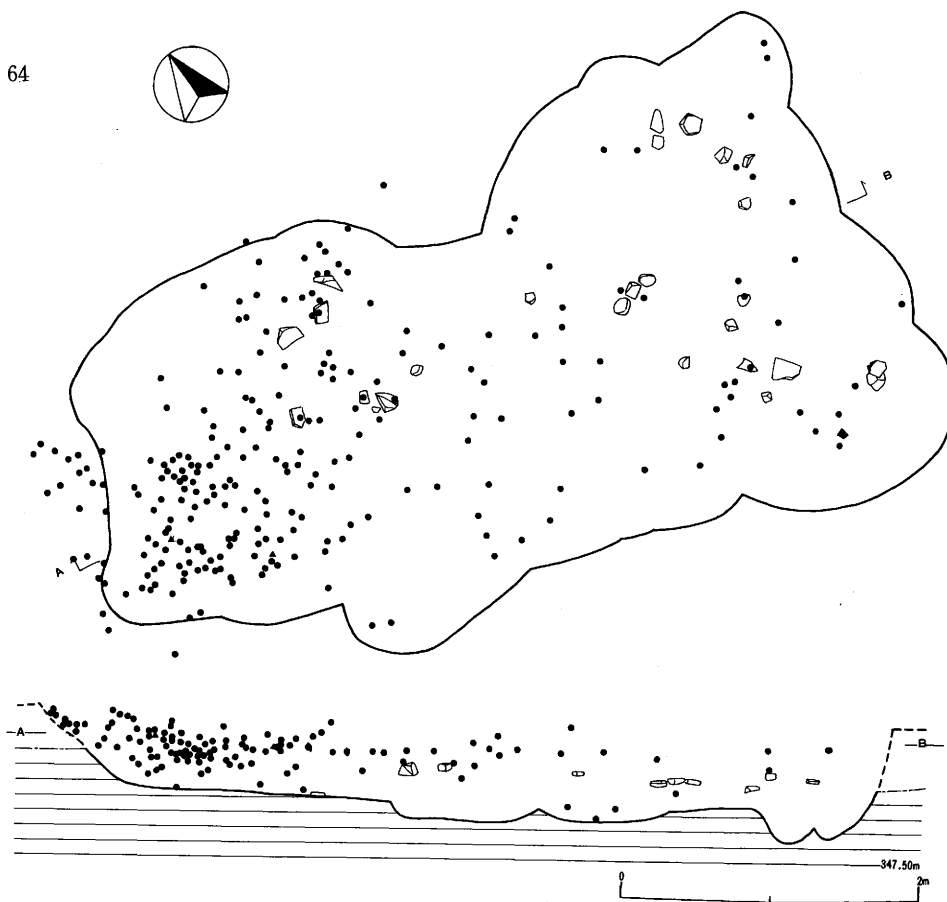
**第63号土坑** (第13図・SK 63)

C-Iに位置する。120×108cm、半月よりややふくらんだ形で北壁側の底部に円形で深さ35cmおち込みあり。中底13cm位の深さである。土器1片出土している。

**第64号土坑** (竪穴遺構、第14・15図参照)

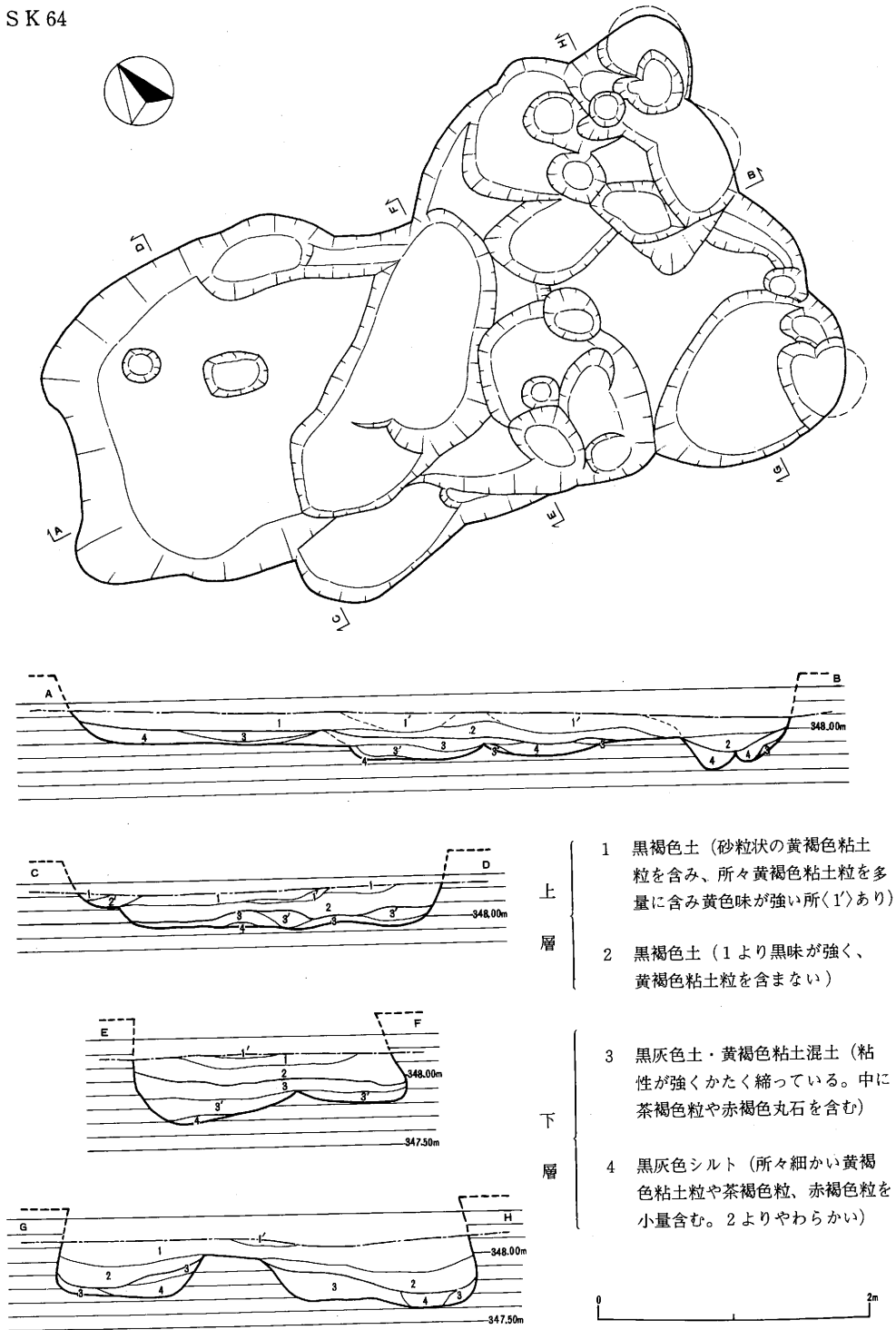
E-2とF-2にまたがり今回表出した土坑中最も大きな土坑である。出土遺物も土器、鉄製品など多量に発見され、一番興味がひかれた土坑でもある。最も広い所で約600cm、狭い所で230cmある。深さがほぼ30cm強で内側も複雑形状を呈している。

SK 64



第14図 第64号土坑遺物分布図 (1:50)

SK 64



第15図 第64号土坑 (1 : 50)

#### 第65号土坑（第13図・SK 65）

D-2とE-2の線上に位置する。80×97cmの大きさである。中段部分は10cm足らずの深さだが、100cm強の深さをもち、底部は長方形を呈している。井戸を除く深さにおいては今回の土坑中五指に入る深さを示している。出土遺物はなし。

#### 第66号土坑（第13図・SK 66）

E-2とF-2にまたがる。竪穴遺構の南隣に位置する。97×78cmの大きさ。やはり中段部分は10cm強とあまり深くないものの、最深部が90cmに達し底部は長方形を呈しているのが特色だ。出土遺物はなし。

#### 第67号土坑（第13図・SK 67）

G-1、後述する掘立柱建築址の南隣に位置する。70×110cmの大きさ。底部が長方形で135cmの深さを記録している。出土遺物なし。

#### 第68号土坑（第13図・SK 68）

H-1に位置する。47×95cmの大ききでやはり底部は長方形を示し、深さが107cmある。出土遺物がない。

## 2 井戸址

#### 第3号井戸址（第16図・SE 3）

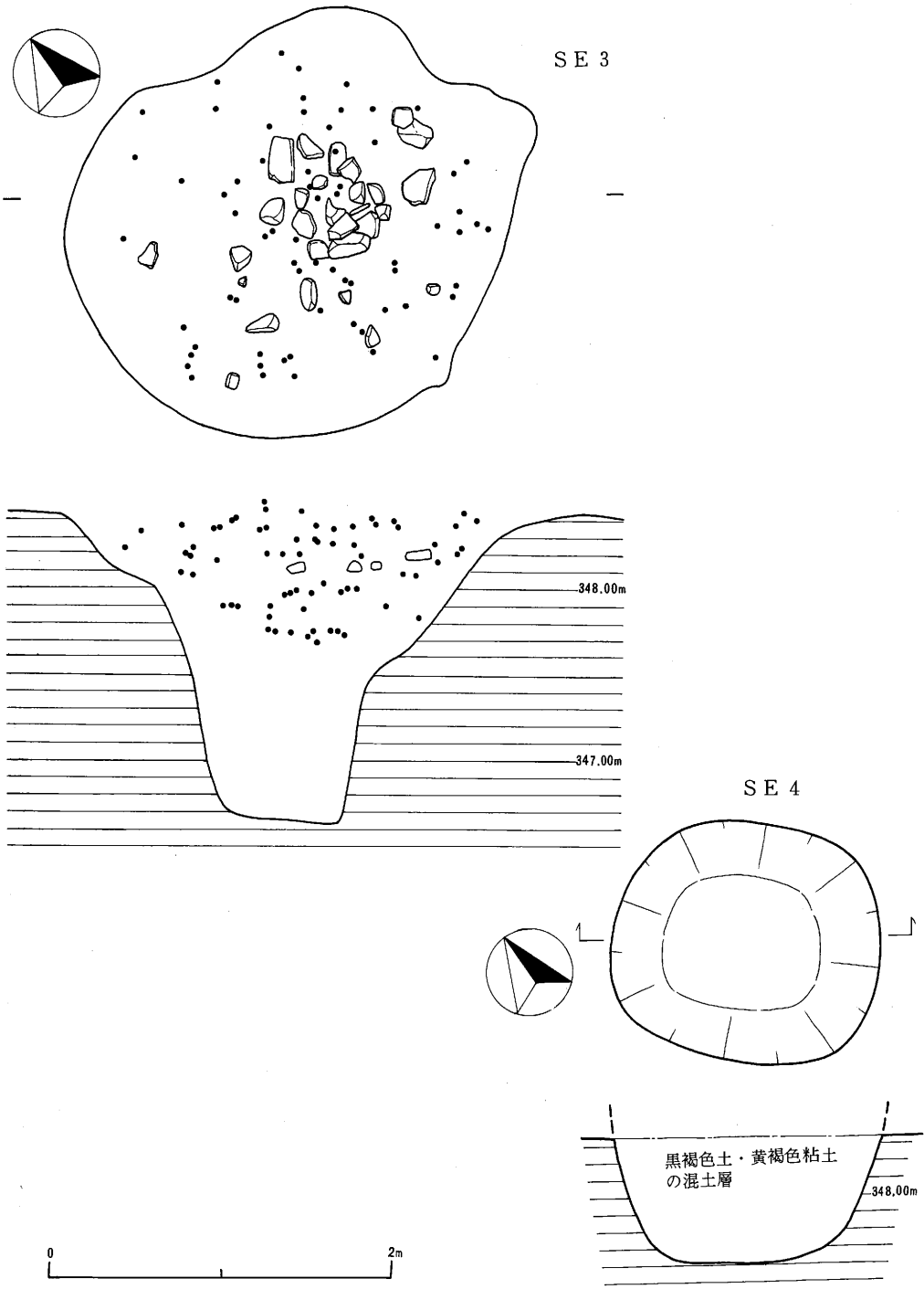
A-6グリットに位置し、今回の調査では最も多く遺物が出土した井戸址である。その東隣には弥生期第1号住居址、そして第7号掘立柱建築址がみられる。規模は260×250cmの大ききで、歪んだ円形を示す。深さは185cmあるが、上部90cm位の厚さの中から全出土土器が表出されている。

#### 第4号井戸址（第16図・SE 4）

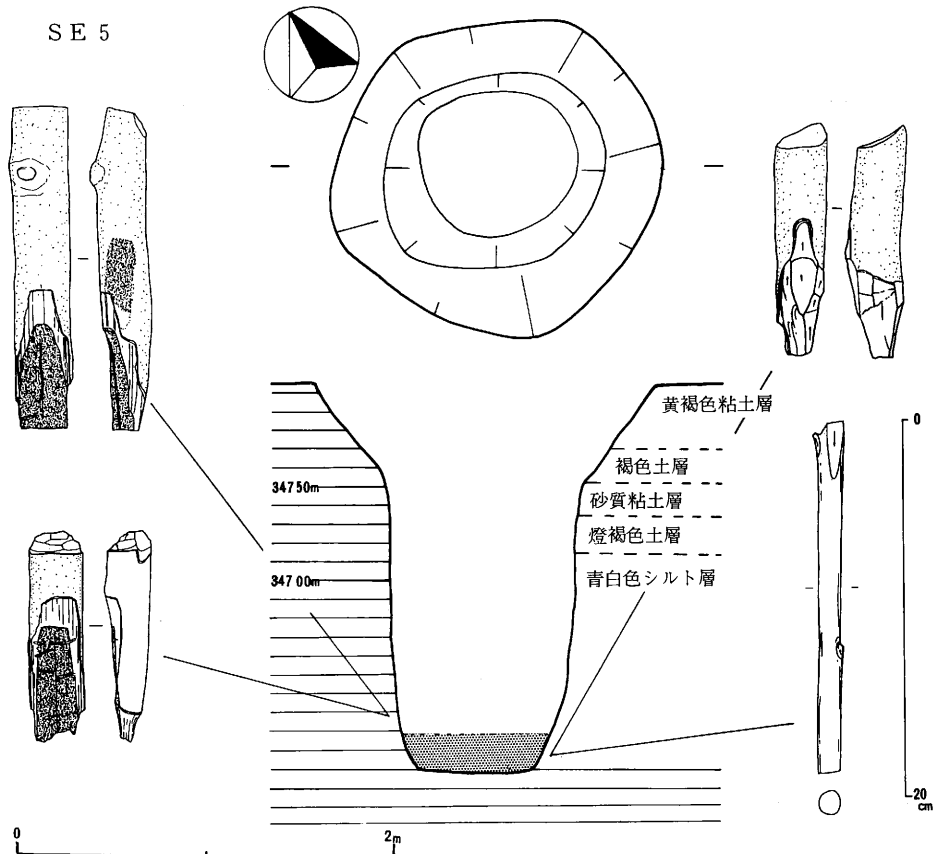
A-7とA-8グリットに位置し、第3号井戸址と隣接して発見されたもの。155×140cmの不完全な円形で、深さ75cmである。覆土は黄褐色粘土質層が混じっており、掘ってすぐに埋めた痕跡が窺える。昭和53年の調査で確認された二棟が第3・4号井戸址の直ぐ西隣りにあることがわかる。

#### 第5号井戸址（第17図・SE 5）

F-4グリットに位置する。南側には多くの遺物を出土させた第64号土坑がある。180×170cmのほぼ円形を示す。深さ206cmあって、底部から木製品が数点出土した。今回の調査で表出した3基の井戸址並びに第65～68号土坑について、いずれも発掘基礎地盤から120～130cm辺りより地下水が相当量しみ出てきたことを考えると、当地の地下水位がかなり高いといえそうだ。



第16図 第3・4号井戸址 (1:40)



第17図 第5号井戸址 (1:40)

### 3 掘立柱建築址

#### 第6号掘立柱建築址 (第18図)

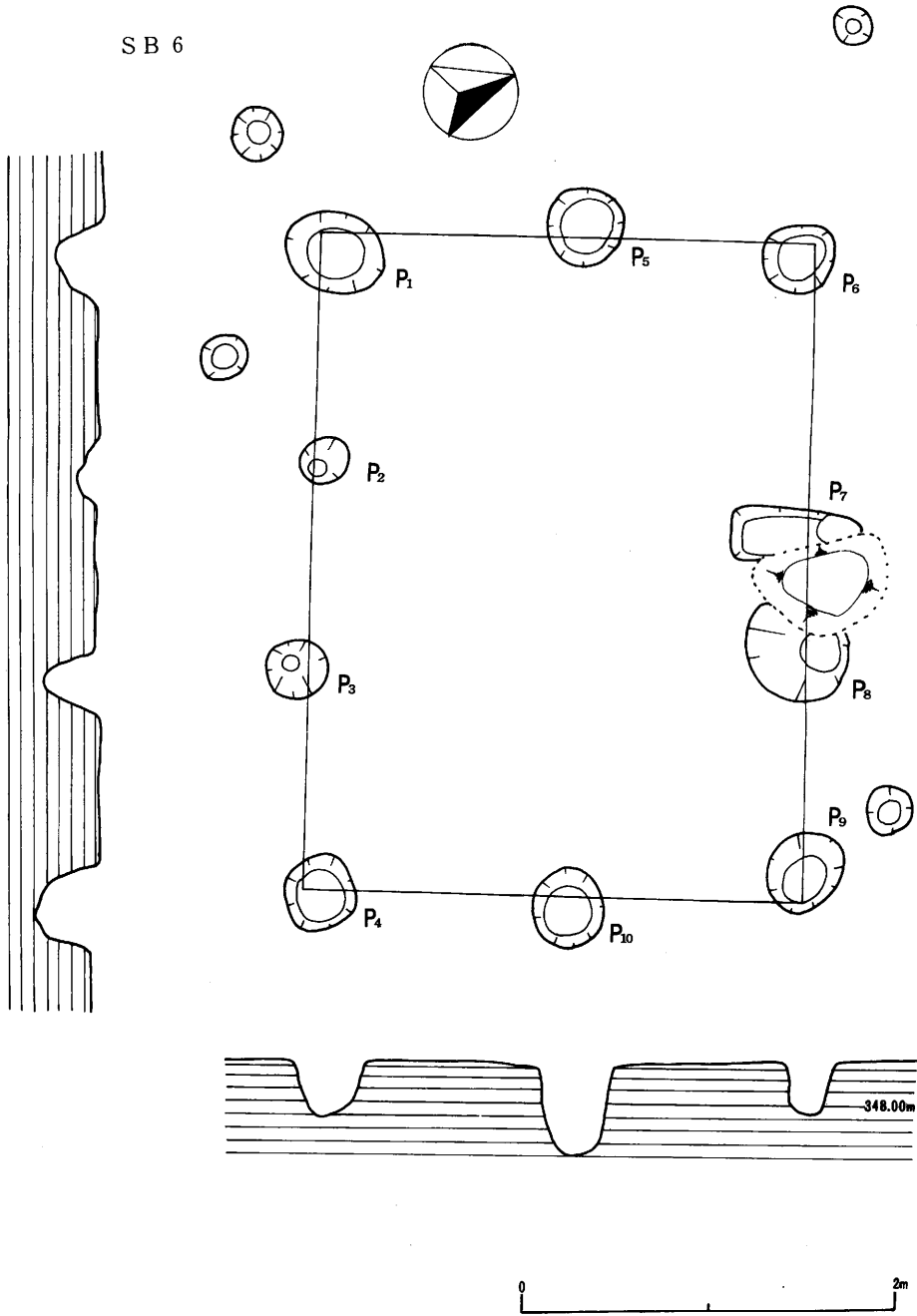
A-1・2とB-1・2の4グリットにまたがっており、東西に長方形に存在している。対象ピットが東西に4本、南北に3本連なっている。深さは13cmから最も深いもので55cmあった。東北350cm、南北270cmである。

#### 第7号掘立柱建築址 (第19図)

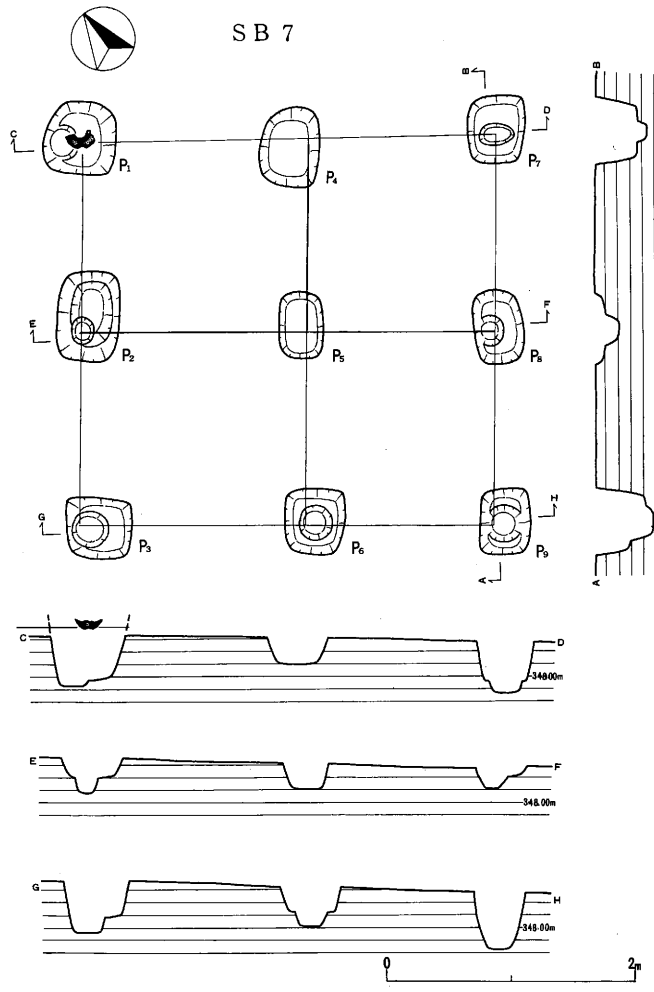
B-7・8とC-7・8の4グリットに位置している。9本の柱址があり、最も北側のピットより土器片が出土している。9本のうち7本のピットは二段底の構築が認められる。4角のうち深さ40cmが3本、45cmが1本となっている。他の5本のピットはそれより浅く15~30cmの間である。東西330cm、南北320cmのほぼ正方形だ。



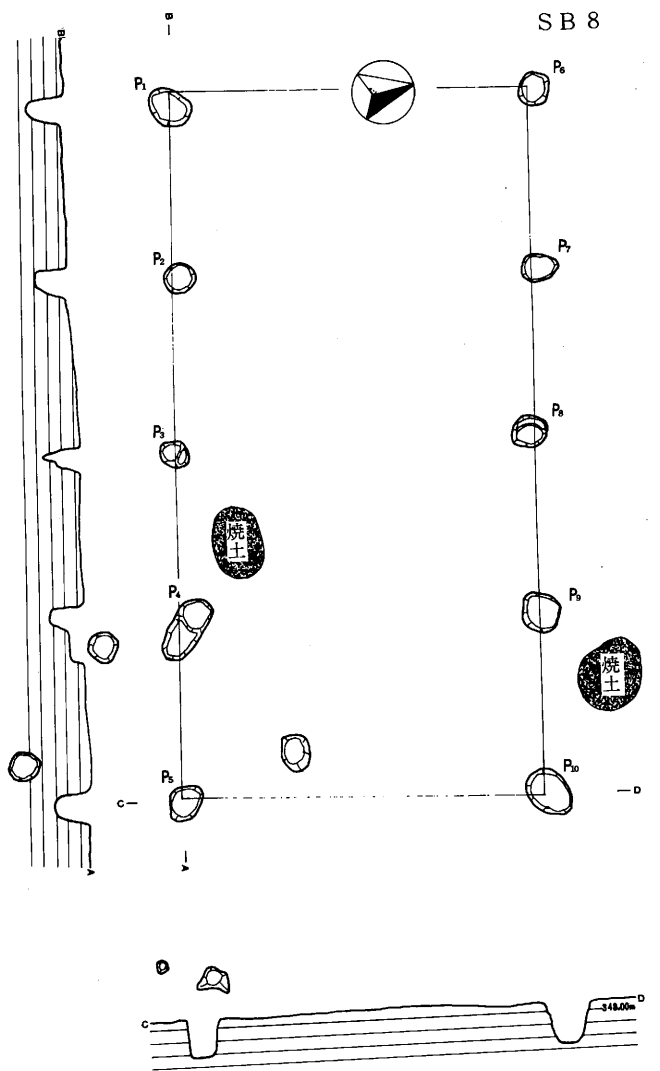
SB 6



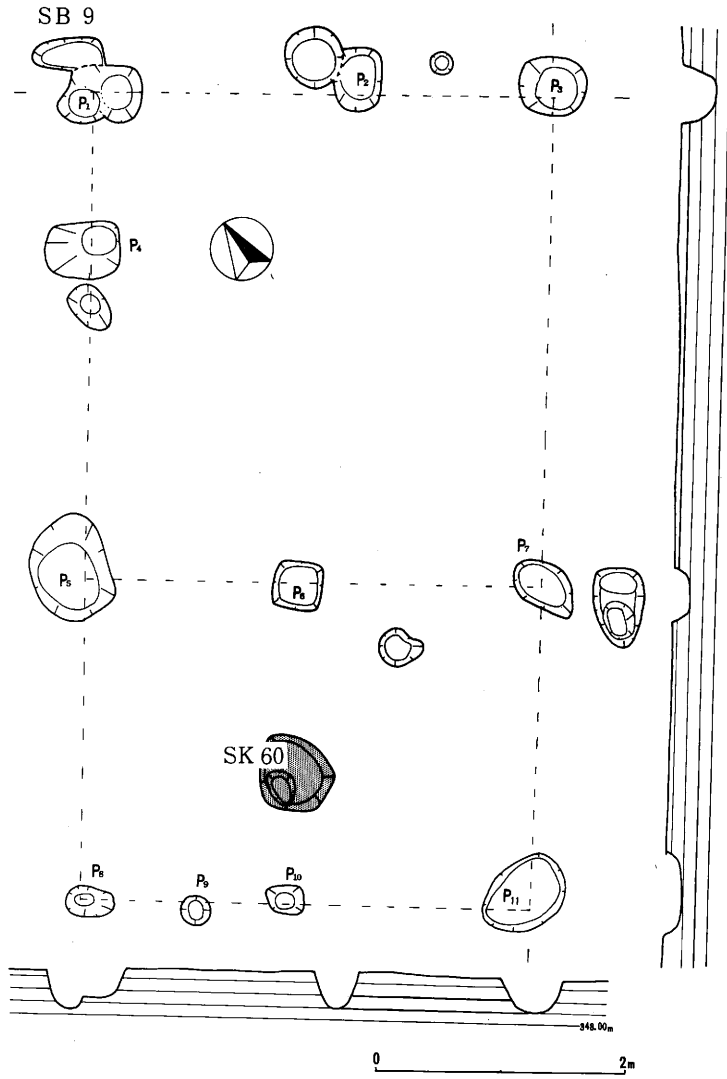
第18图 第6号掘立柱建筑址 (1:60)



第19图 第7号掘立柱建筑址 (1:60)



第20图 第8号掘立柱建筑址 (1:60)



第21图 第9号掘立柱建筑址 (1 : 60)

**第8号掘立柱建築址（第20図）**

G-1・2とH-1・2の4グリットにあり、この址も東西に長方形になっている。址が東西に5本ずつ並列している。深さをみると25～35cmの間である。発掘地内で最も東側に位置している。東西に560cm、南北に300cmあった。

**第9号掘立柱建築址（第21図）**

C-1・イとD-1・イの4グリットにまたがっている。東西400cm、南北450cmと概ね設定した。フイゴ羽口、鉄滓、土器片等を多量に出土した第60号土坑は、この建築址内に存在する。

No.	棟方向	規 模	柱間寸法(m)		柱 間 隔(m)	
		桁行×梁行(間)	桁行	梁行	桁 行	梁 行
6	WE	3×2	3.5	2.7	1.1~1.2	1.1~1.4
7	—	2×2	2 ~ 2.2		1 ~ 1.2	
8	WE	4×1	3.7	1.9	0.9	1.9
9	NS	3×2	4.2	2.4	1.1~1.8	1~1.4

**第2表 掘立柱建築址計測表**

## 第Ⅳ章 出土遺物

### 第1節 縄文時代の遺物

該期に属する遺構は、土拵が2基検出されたものの、第2号土拵より1点(第22図18)出土した以外、主にA・B-6・7・8グリット付近より散在的に出土したものである。以下に簡単に説明を加えたい。

#### 第1群土器(第22図1)

器面全体に孤線と直線の組み合わせによる沈線文を施した土器である。竹管状工具を強く器面に押し当て数条の密接する沈線を描いている。焼成は良好で堅緻に仕上がっている。色調は茶褐色を呈する。本群土器は三枚原遺跡出土第12群土器や扇平遺跡出土Ⅲ類土器に類例があり、時期的には前期最終末に置かれるであろう。

#### 第2群土器(第22図2・3)

中期初頭に置かれる土器である。2は口縁部破片で、口唇部は渦巻状の隆帯が貼付される。器表面には棒状工具による沈線が施される。色調は黒褐色を呈し、胎土には、雲母、小石等含まれる。3は屈曲部が2段となる器形を呈すものでであろう。頸部以下は結節S字状文が垂下する。本例は梨久保遺跡に類例がある。

#### 第3群土器(第22図4・5・8)

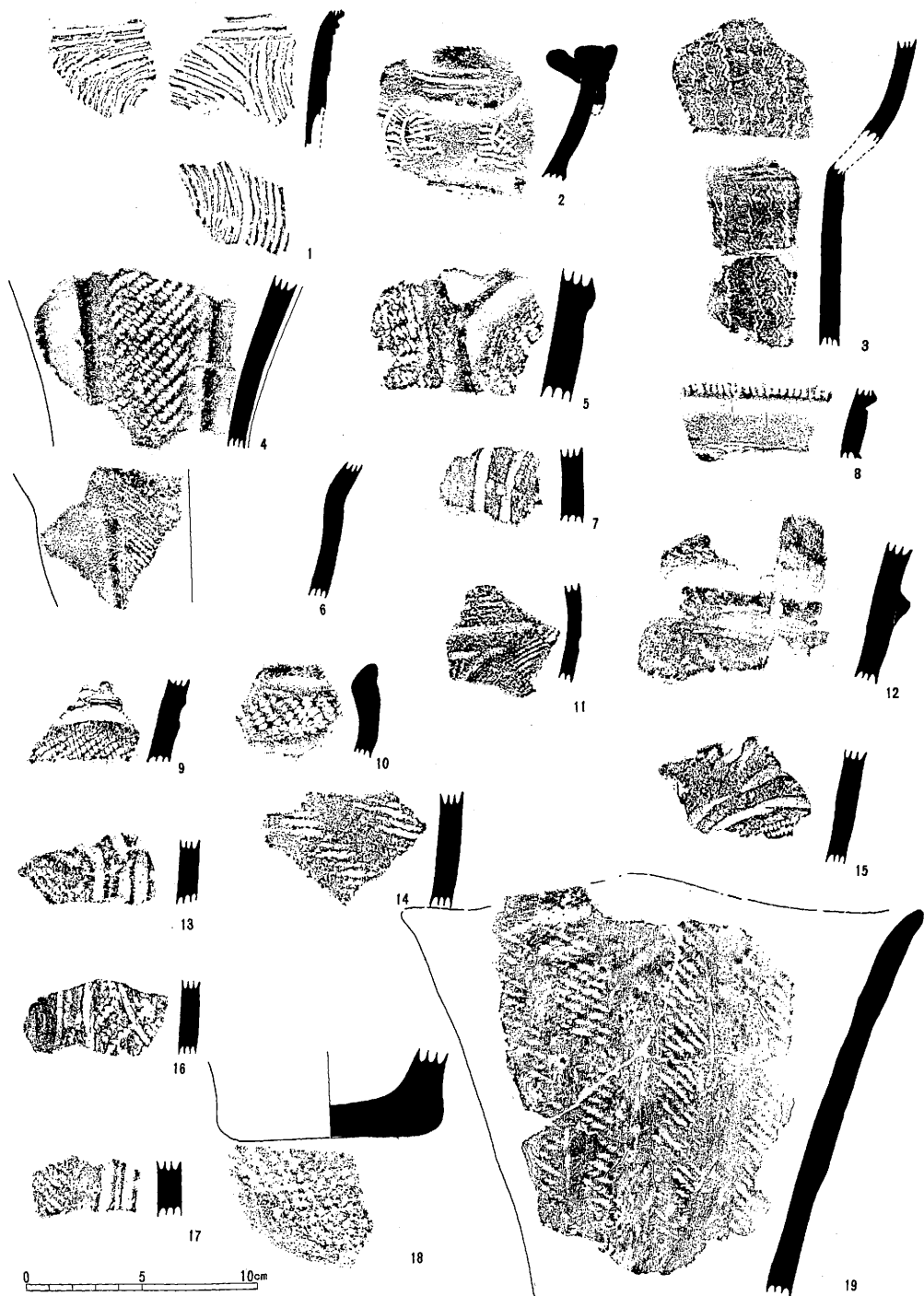
中期中葉の土器である。4・5は縄文を地文とし、隆帯によって区画される。8は横走る隆帯に刻み目が施される。4・5はともに褐色を呈し、8は黄褐色、胎土、焼成とも良好である。勝坂様式に比定される。

#### 第4群土器(第22図6・7・9～19)

中期後半の土器を一括した。文様区画を沈線で行ない、地文が縄文のものが大部分を占める。10は口縁部でやや内湾する。19は波状口縁を有する深鉢形土器で、縄文を地文とするが、口縁部および口縁から胴部にかけて祖いナデにより文様区画を意図している。18は底部で、網代痕を有するが胎土・焼成ともに不良で詳細は不明である。なお、11、12は後期に属するものと思われる。11は沈線間を磨消し、12は無文土器で、隆帯が横走る。

以上、断片的であるが本遺跡で縄文時代の痕跡が認められた。出土地区は調査地区の北側に集中しており、南側ではほとんど出土していないことから縄文時代の生活地は北側の谷状地に臨む

微高地の小範囲に占居していたものと推測される。



第22図 縄文時代の遺物 (1 : 3)

## 第2節 弥生時代の遺物

### 1 土器 (第23図)

弥生時代の土器は、第1号竪穴住居址およびその周辺からまとまって出土したほか、第1号土坑(YSK1)やA-3、H-4グリットなど調査区東北部より散在的に出土している。総量はコンテナ一箱に満たない。

壺・甕・鉢・高坏・小型壺などがある。図示したものの他は小片である。

壺(1~5) 1は頸部片、外面はハケののちヘラミガキ、内面はナデ、淡茶褐色を呈する。2・3も頸部片で、外面は縄文を地文とし、ヘラ描直線文・波状文を加える。内面はナデ、漆褐色を呈する。4は胴部中央部片で、外面は縄文を地文とし、上部にヘラ描直線文を加え、下の直線文間にヘラ刻み目をめぐらす。下部はヘラ描波状文を加え、中位波状文間は縄文を磨消す。波状文より下はハケののちヘラミガキ。内面はナデ。明るい褐色を呈する。5は胴部下半部で、図示した部分はほぼ完形。外面はハケの後胴中央よりやや下位にヘラ描波状文を3条めぐらし、その上部に竹管文を加える。内面はハケ。底部中央を焼成後に穿孔している。茶褐色を呈する。

甕(6~8) 甕はいずれも、外反する短い口縁部と肩の張らない直線的な胴部を基本形とする。8は底部を欠く以外ほぼ完形、6・7は小片。いずれも外面頸部に櫛描平行線文を一条めぐらす。7・8はさらに頸部櫛描文と同一の原体で胴部に斜線を加える。いずれも口縁端部は端面をなし、6・7は端面に縄文をめぐらす。内面口縁部近くはナデ、以下はハケを施した後、部分的にナデを加える。6・7は暗茶褐色、8は淡褐色を呈する。

鉢(9) 内・外面とも赤彩されている。竪穴住居址の東南柱穴内出土、60%残存。内外面とも丁寧な磨き。口縁端外側に小突起をもつ。

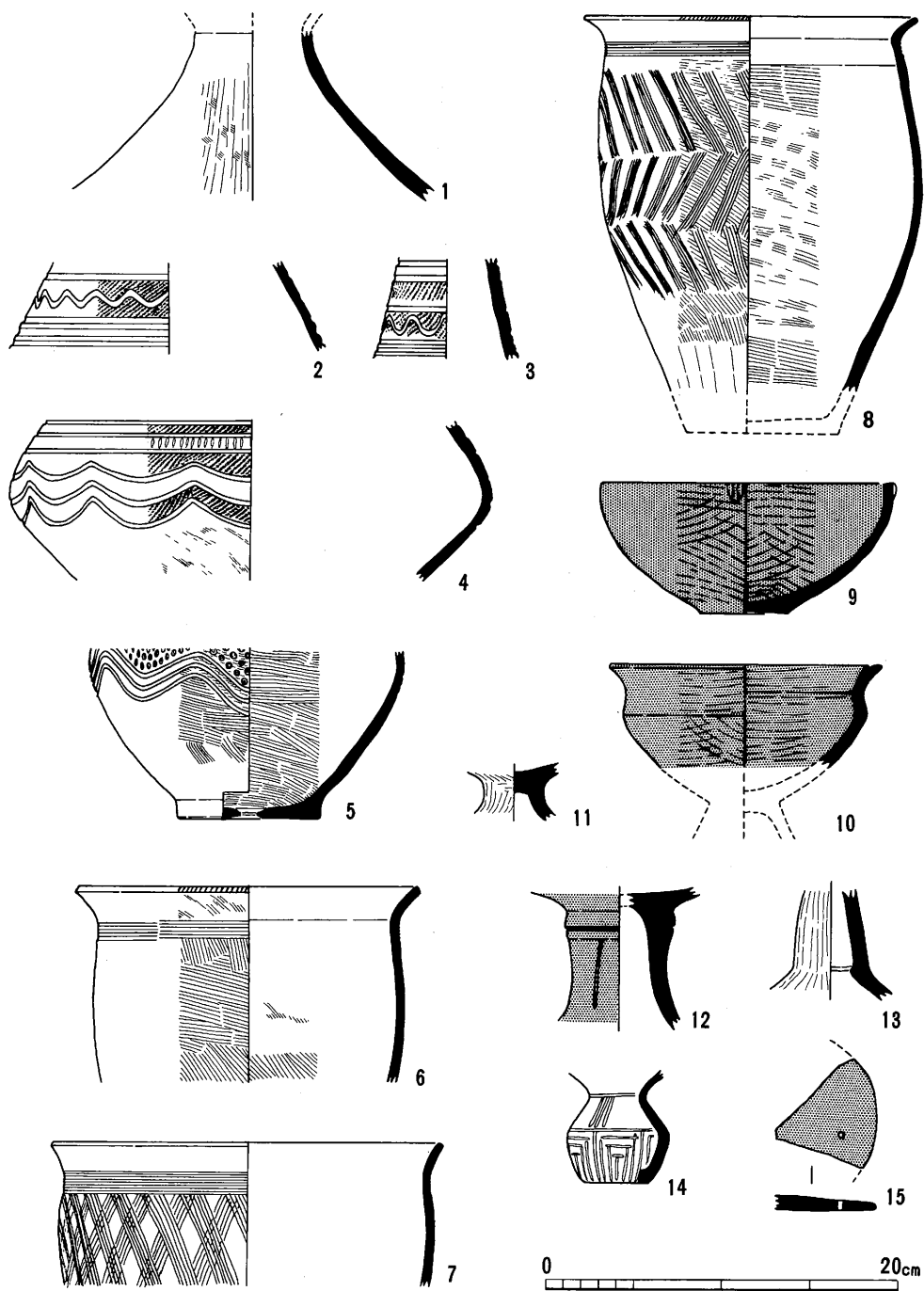
高坏(10・12) いずれも赤彩されている。10は「S」字状に屈曲する口縁部をもつもので高坏としては小型の部類である。内外面とも丁寧に磨いている。12は脚部で、大型品である。脚上端部に、中央にヘラ描直線をおく低い突帯状隆起をめぐらせ、その下に3ヶ所ヘラ描縦線を加える。

小形壺(14) F4地区小土坑YSK1からほぼ完形で単独出土した。頸部と胴部中央に一条のヘラ描直線文をめぐらせ、肩部にはヘラ描縦線3~5本を一単位としたものを3ヶ所に配し、胴部下半は5ヶ所の「コ」の字重ね文を配する。淡褐色を呈する。

蓋(13) 表裏両面とも赤色塗彩され、焼成前の小孔がある。

古墳時代の土器(11・13) 出土数が図示した2点のみのため便宜上当節に含めた。11は台付





第23図 弥生時代の土器 (1 : 4)

1・4～9・12：1号住居址、2：A-3、3：C-5、10：H-4、11：A-6、13：SK  
57：YSK 1、15：B-4

鉢ないし高杯の脚部、15は高杯の脚部。両者とも外面は丁寧なヘラミガキ。11は淡褐色、13は赤橙色を呈する。和泉期頃のものか。

**小結** 以上の弥生土器の年代は、ヘラ描沈線文と縄文との併用、壺4・5のヘラ描波状文の形態、小型壺14の「コ」の字重ね文・甕の形態などの諸点が、北信濃の弥生中期後半の標式である中野市栗林遺跡出土土器<sup>注1</sup>に類似することから、弥生時代中期後半の土器群と考えられる。

さらにくわしくみてもよい。飯山地方の弥生中期後半の土器編年は、小境（栗林Ⅰ式、中期中葉）→鍛冶田D（栗林Ⅱ式、中期後葉）→鍛冶田C（百瀬式、中期末）に編年されている<sup>注2</sup>。今この編年に当遺跡の弥生土器のうちでも一括性の高い竪穴住居出土品を対応してみれば、壺において頸部が無文の1や縄文を地文としない5など百瀬式に降る要素をもちつつも、甕において百瀬式にすでに出現し後期に盛行する不連続な櫛描波状文（中部高地型櫛描文）が認められない点など新旧両要素をもつ、この新旧二要素をもつことは鍛冶田D地点出土土器と等しい。したがって当竪穴住居出土土器を栗林Ⅱ式（鍛冶田D）に比定しておきたい。

なお、10の高杯は弥生中期には類例がなく須多峯遺跡方形周溝墓出土品に類例がある。

注1 桐原健「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』49—3 昭和38年

注2 飯山市教育委員会『長野県飯山市旭町遺跡群鍛冶田』昭和55年

注3 高橋桂「北信濃須多ヶ峯弥生式墓墳調査略報」『考古学雑誌』51—3 昭和41年

## 2 石器 (第24図、図版11—34)

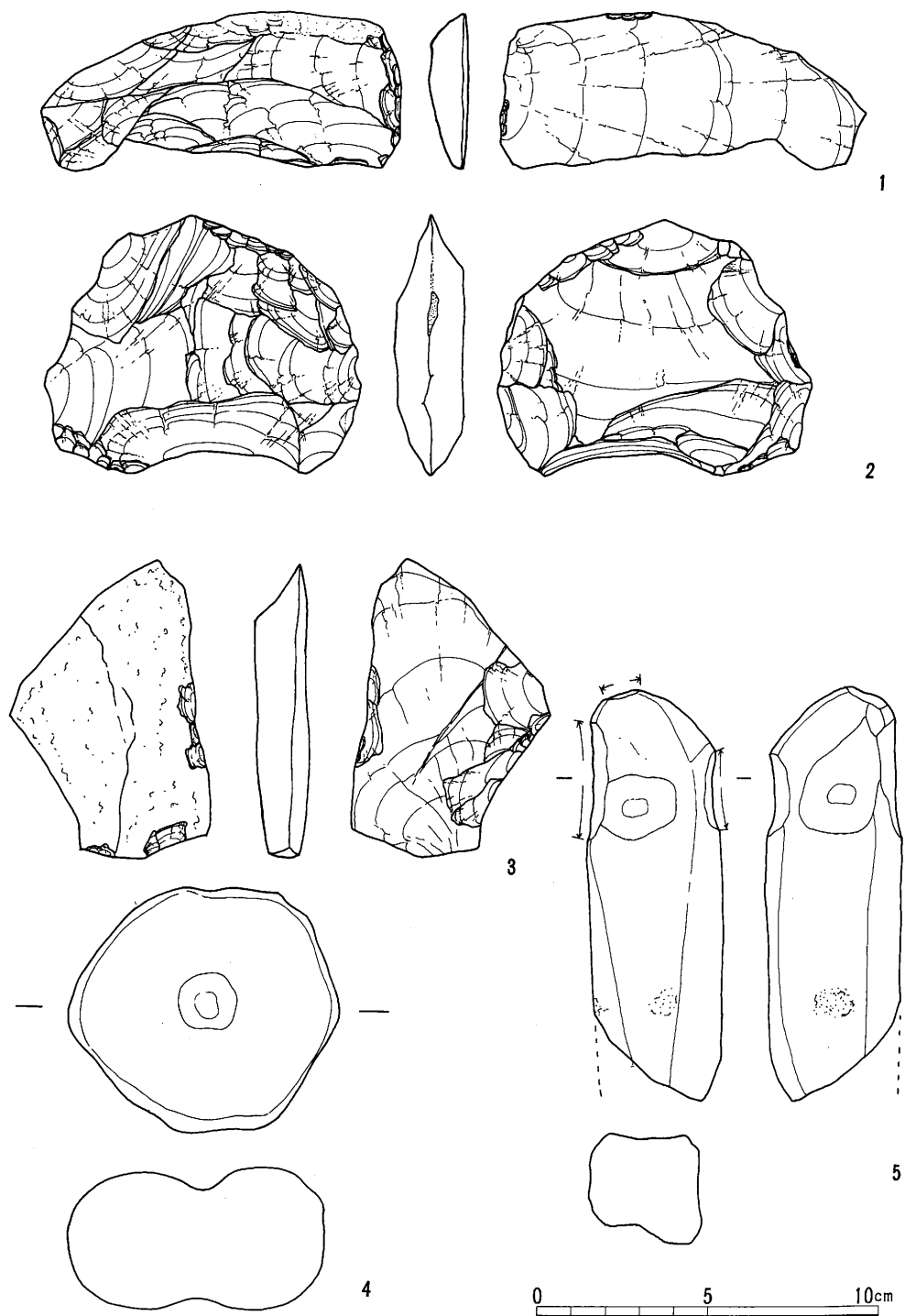
1～3は打製石器で、2・3は弥生第1号住居址、1はその南隣C-6グリットより出土、1の裏面は第1次剝離面をそのまま残し、上肩部は一部磨滅している。木柄を装着した痕か。安山岩製。2は両面とも加工している。粘板岩製。3の裏面は原石の表皮をそのまま残す。安山岩製。

なお第1号住居址からは、数群に分かれて、30片程の剝片が出土している。剝片の石材は2・3に等しい。

4は凹み石で、両面中央と側面を使用する。H-4出土。砂岩製。

5は棒状の敲石である。両端部側面を使用し、下端部側面の使用中に折損したため廃棄されたのだろう。弥生住居址出土安山岩製。

図版11—34は敲石と台石で、敲石はH-2グリット、台石は弥生竪穴住居中央から出土。敲石は先端部のみ使用。安山岩製。台石は上面中央に打痕がある。安山岩製。



第24図 石器 (1 : 2)

## 第2節 平安時代の遺物

### 1 土器 (第25～27図)

平安時代の土器は調査地全域から出土しているが、特に調査地南部の土塚群から集中して出土している。土師器・須恵器があり、灰釉等の施釉陶器は無い。

#### A 土師器 (第25図1～16、第26図17～24)

坏・甕・鉢などがある。

坏 (1～6) 図示したものはいずれも内面黒色土器である。直径17.4cmの大形品 (1) と直径15cm以下の小形品 (3～6) がある。

底部調整法に a～b の3種がある。a は手もちヘラケズリを行うもの (3)、b はロクロケズリを行うもの (2・4)、c はロクロ糸切り痕をそのまま残すもの (1) である。前回調査時の検討で a・b が古く c が新しい手法とされているが、前回、今回とも、3者が同一遺構に共存する。ちなみに S K 64 出土品の比率をみれば、a が6、b が5、c が2個体である。

いずれも胎土に砂を含まず、淡茶褐色を呈する。

なお、同形態同手法だが内面黒色処理がなされない坏も、図示してないが、少量ある。

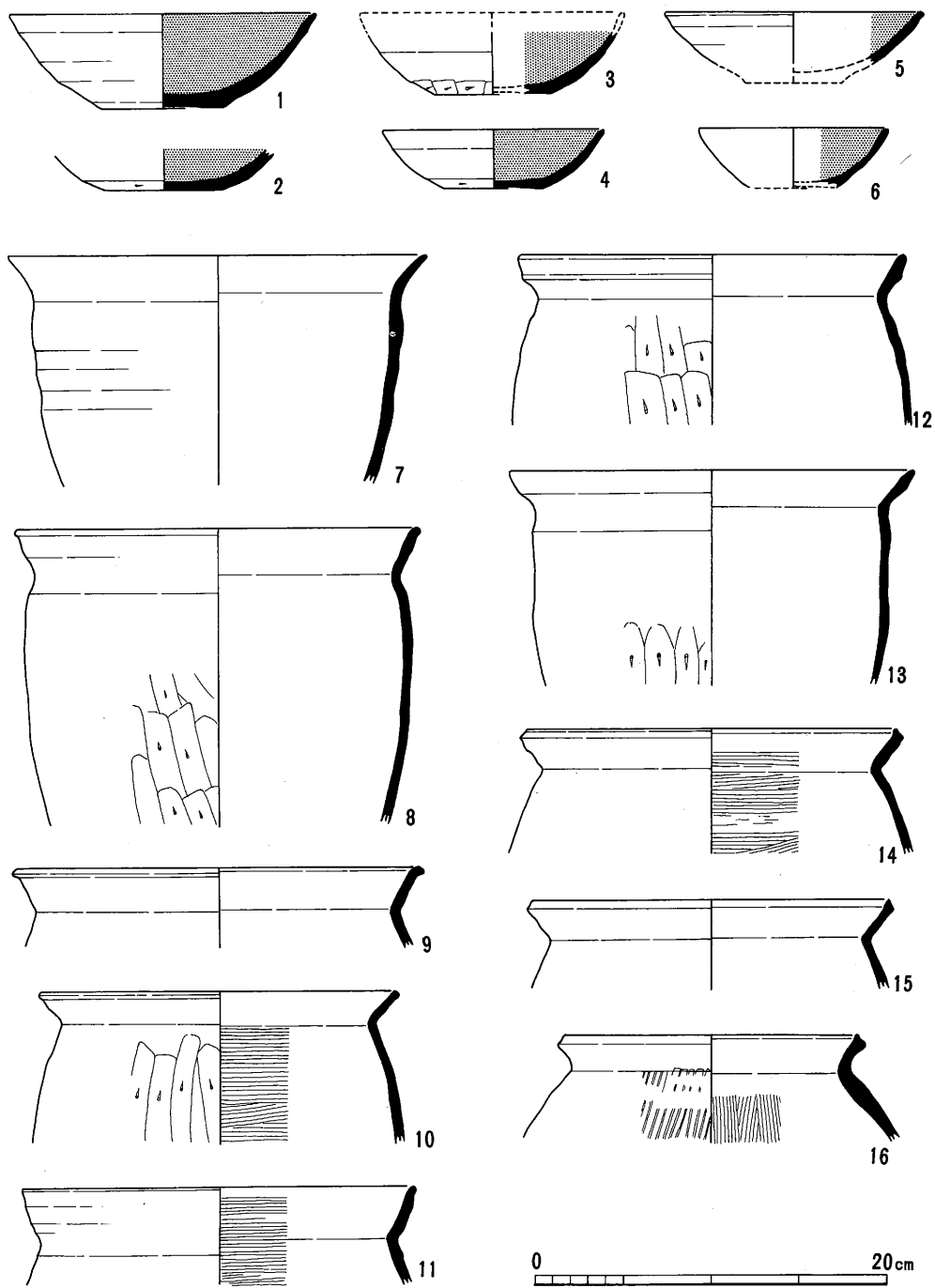
甕 (第25図7～16、第26図17・18・23・24) 甕は形態から大きく A・B 2タイプに分かれる。Aタイプ (7～13) は頸の屈曲が弱く、肩があまり張らないもので、口縁部が素直に終るもの (7)、端部が若干外方に肥厚するもの (8～10)、中央で段をもつもの (11～13) がある。外面の調整は口縁部から肩部は横ナデ、以下は縦ヘラケズリ、内面の調整は横ナデないし横ハケである。淡褐色系統が一般的である。

Bタイプ (14～18) は頸の屈曲が強く、肩の張りがAより強い。口縁端部が内側に折り返される。直径30cmの大型品 (18) を含む。外面の調整は基本的にAタイプに等しいと考えられるが、1点のみ (16) 平行タタキのものがある。内面の調整は横ナデないしハケ。淡褐色系統が一般的だが、16は赤褐色とやや異なる。

Aタイプ対Bタイプの比率は、S K 44・47・50・64出土品で数えると、A約13：B約9である。23・24は甕底部で、23は外面に平行タタキがあり、色も赤褐色で16によく似ている。

なお、肩部に「×」の線刻をしたものが1点ある。

鉢 (19～22) 小型の甕形を呈し、ロクロ成形されているものを鉢とした。内外面とも基本的な調整はロクロナデであるが、20は底部外面にケズリを加えている。19は底部にロクロ糸切り痕が残る。いずれも胎土に砂粒を含まず、色調は茶褐色系である。



第25図 平安時代の土器 1 (1 : 4)

1 ~ 6 · 13 · 14 : SK 43、7 : SK 53、8 : SK 56、9 · 11 · 12 : C - 1、  
 10 : SK 52、15 : C - 1 · C - 2、16 : SK 43 · SK 55 · C - 口

## B 須恵器（第26図25～38、第27図39～47）

坏・蓋・壺・甕などがある。

坏（25～36） 坏は高台をもたないAと、高台をもつBの2タイプに分かれる。

AタイプはS K 44・47・50・64出土品で数えると20点余りであるが、深い形態で灰色の（32）、ややいびつで灰色の（33）以外は、25～31のタイプのものである。25～31は概して焼成が悪く軟質で、褐色から灰白色を呈し、内・外面ともロクロナデで、底部外面にロクロ糸切り痕を残す。31には墨書「大」がある。

Bタイプは図示した3点（34～36）のみである。34は高台が底部外端より内側に付く古い形態のものである。硬質で青灰色を呈する。35・36は高台が底部外端に付く。35は灰釉陶器の形態によく似ている。底部外面にロクロ糸切り痕が残る。底部外面中央にヘラ記号「|」がある。軟質で灰白色を呈する。

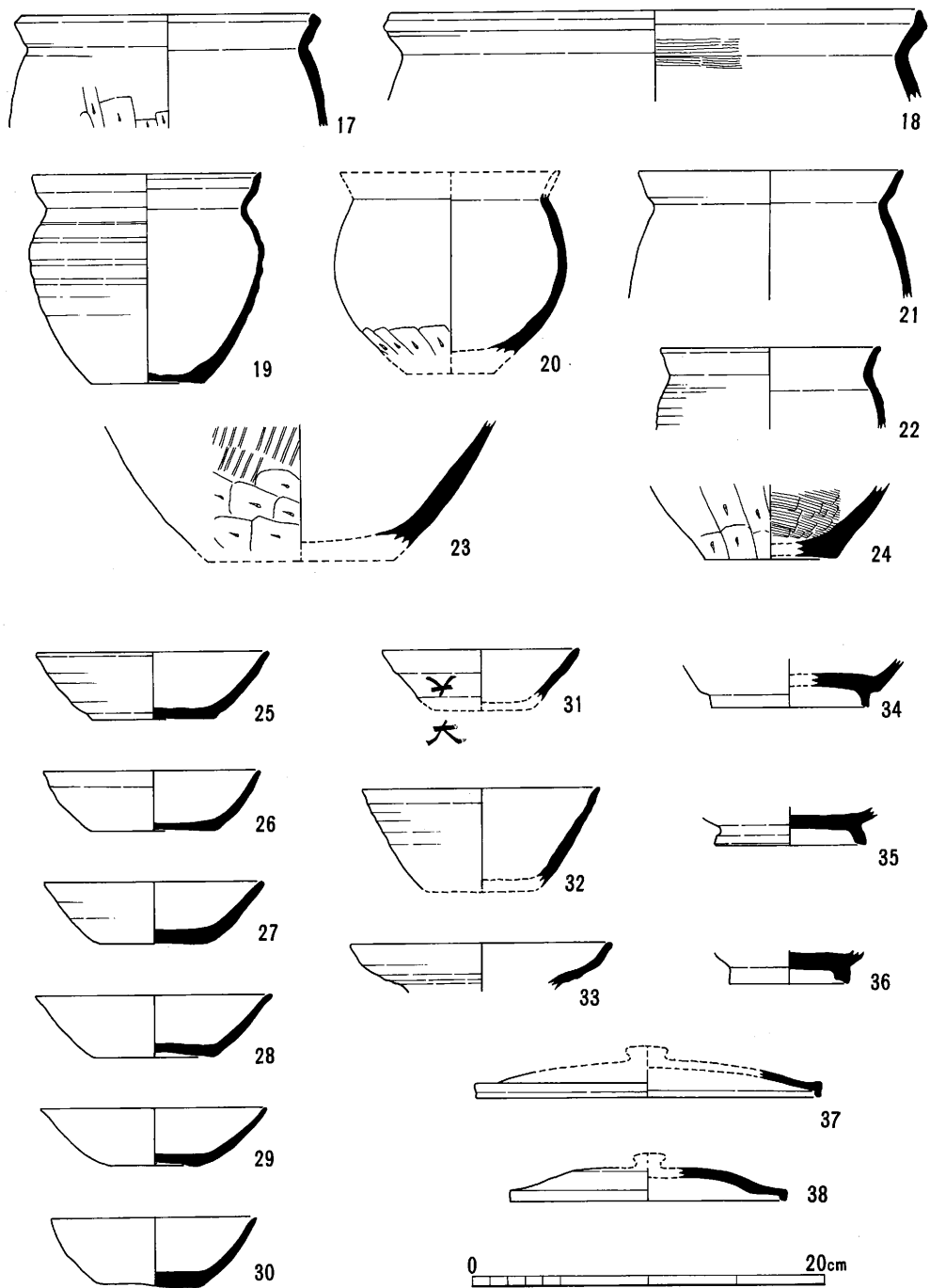
蓋（37・38） 蓋は図示した2個体のみである。いずれもつまみが付くと思われる。37は硬質で灰色。38は軟質で灰白色。38の天井部はロクロケズリが施されている。

壺（39～44） 壺は図示したものでほぼすべてである。広口壺（39・40）、小壺（42）、肩に一条の突帯と4ヶ所の方角突起が付く所謂四耳壺（41）などがある。いずれも硬質で灰色～暗灰色を呈する。

甕（45～47） 甕は図示したものの他は体部片である。45～47は異個体だが同一形態のものと思われる。大きく広い口頸部と肩部にめぐる一条の突帯が形態的な、外面の細かい平行タタキが技法的な特徴で、所謂四耳壺と呼ばれるものである。硬質で、断面が赤紫色、表面が暗灰色を呈する。

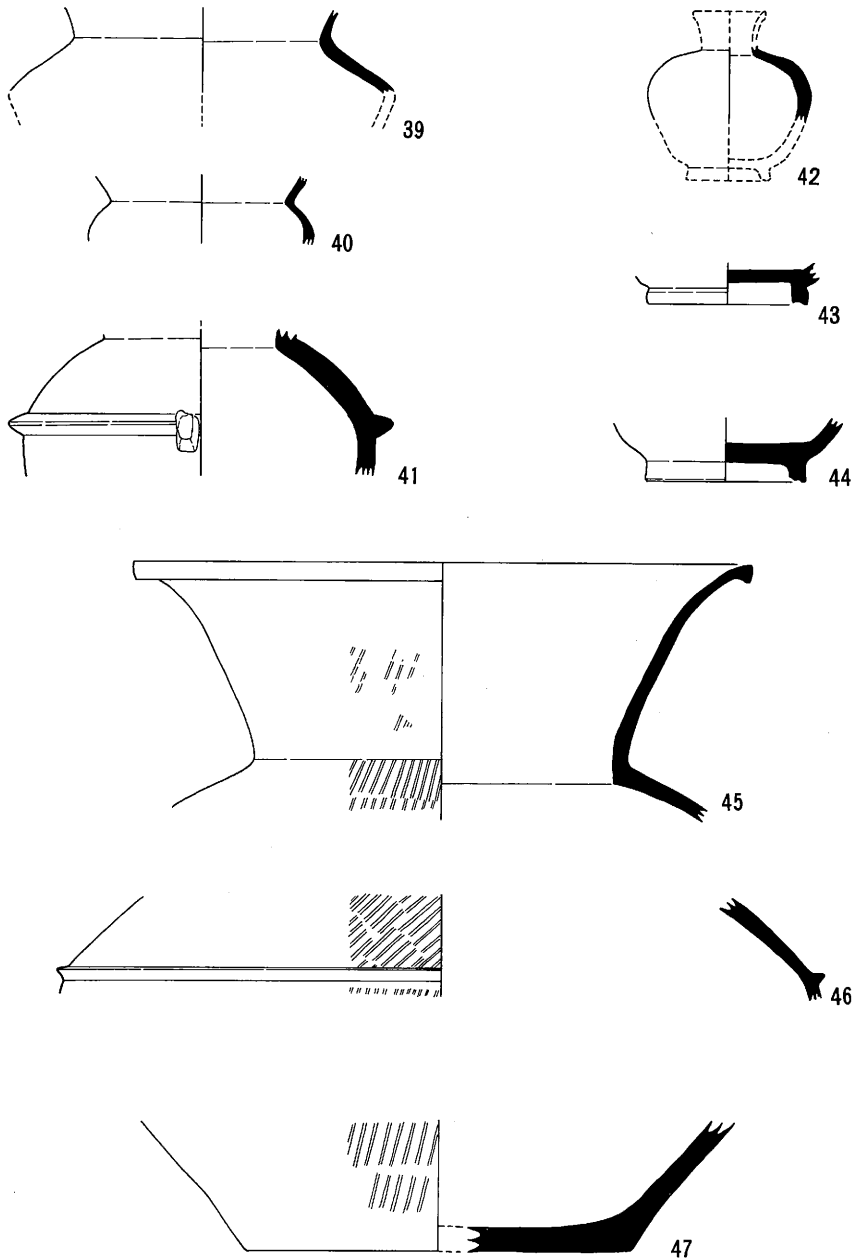
## C 小結

以上の平安時代の土器群は、前回調査出土品と基本的に同じものであり、前回調査出土品同様9世紀後半～10世紀代の年代が与えられる。



第26図 平安時代の土器 2 (1:4)

17~24: 土師器。25~38: 須恵器  
 17・20・28: SK 53、18・21・22・25~27・31・32・35: SK 43、  
 19: 弥生住居址、23: 第7号掘立柱建築址 P1、29: SK 48、  
 30: C 1、33: E 2、34・37: SK 45、36: SK 55、38: SK 47



第27図 平安時代の土器3 (1:4)

39: SK 47、40: H 2、41: C 2、42・43: SK 43、44: SK 46、  
45: SK 57・SK 60・A口、46: A口、47: SK 46・47



## 2 その他の遺物 (第28図～30図)

その他平安時代の遺物として、ファイゴ羽口・鉄滓・鉄製品・木製品・石製品がある。

### A ファイゴ羽口 (第28図1～8)

ファイゴ羽口は、図示した8片がすべてSK 60出土であり、SK 60以外ではSK 64とB-3グリットから小片がそれぞれ1片ずつ出土しているにすぎない。ファイゴ羽口はいずれも円棒に粘土を巻きつけて成形され、外表面は縦ナデが施される。円棒の直径はやや小さめの6以外ほぼ一定している。ナデの原体は板のようなやや硬いものらしく、6では縦線が痕跡として残っており、1でも縦の面が残る。いずれも使用後に廃棄されたもので、先端部は高熱をうけて黒灰色かつ多孔質に熔変している。特に1・5・7はそれが著しく、1は融解して下流した塊が推定下端(図左側)に認められ、5・7は先端が黒躍色ガラス質となっている。送風器との接続部が残るのは2のみで、穴の内側の粘土を取って穴を広げている。

また図示した8片は、2と5または7、3と5または7など同一個体異片の可能性がある。

### B 鉄滓 (第28図9～12)

鉄滓もSK 60よりほとんどが出土した。SK 60出土総重量は2.8kgである。他はSK 64・pit 2・SK 52・SK 53・SK 54・SK 55、B-1・C-2・C-6・D-1・D-2・G-3地区より1～数塊ずつ出土しているのみである。

鉄滓は形状からa～cの3タイプに分かれる。aタイプ(9・12)は、多孔質で重く、茶色を呈する。形は基本的には重ね碗形である。中に木あるいは葦類と思われる繊維質のものを含むもの(12)がある。9は重さ250g、12は重さ150g。aタイプは出土量が多く、半数以上ある。いわゆる碗形滓に属する。

bタイプ(10)は気泡の塊で軽く、表面は黒色味を帯び光沢がある。ファイゴ羽口の先端が融解したものが含まれている可能性がある。10は重さ28g。bタイプはaタイプに次いで出土量が多い。

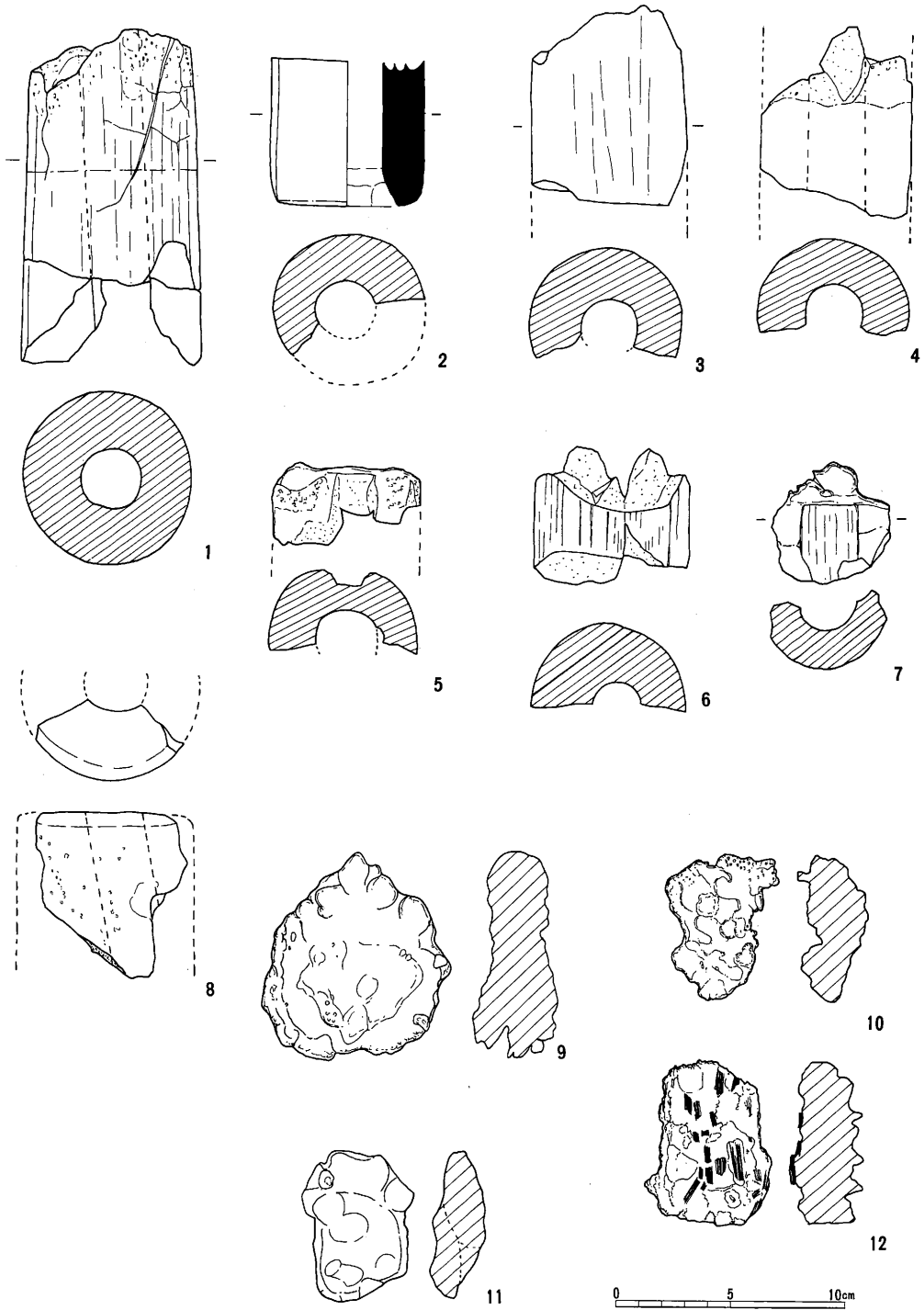
cタイプ(11)は非多孔質で重く、黒灰色系で、表面にやや光沢がある。11は重さ118g。出土量は数点と少ない。

### C 鉄製品 (第30図1～8)

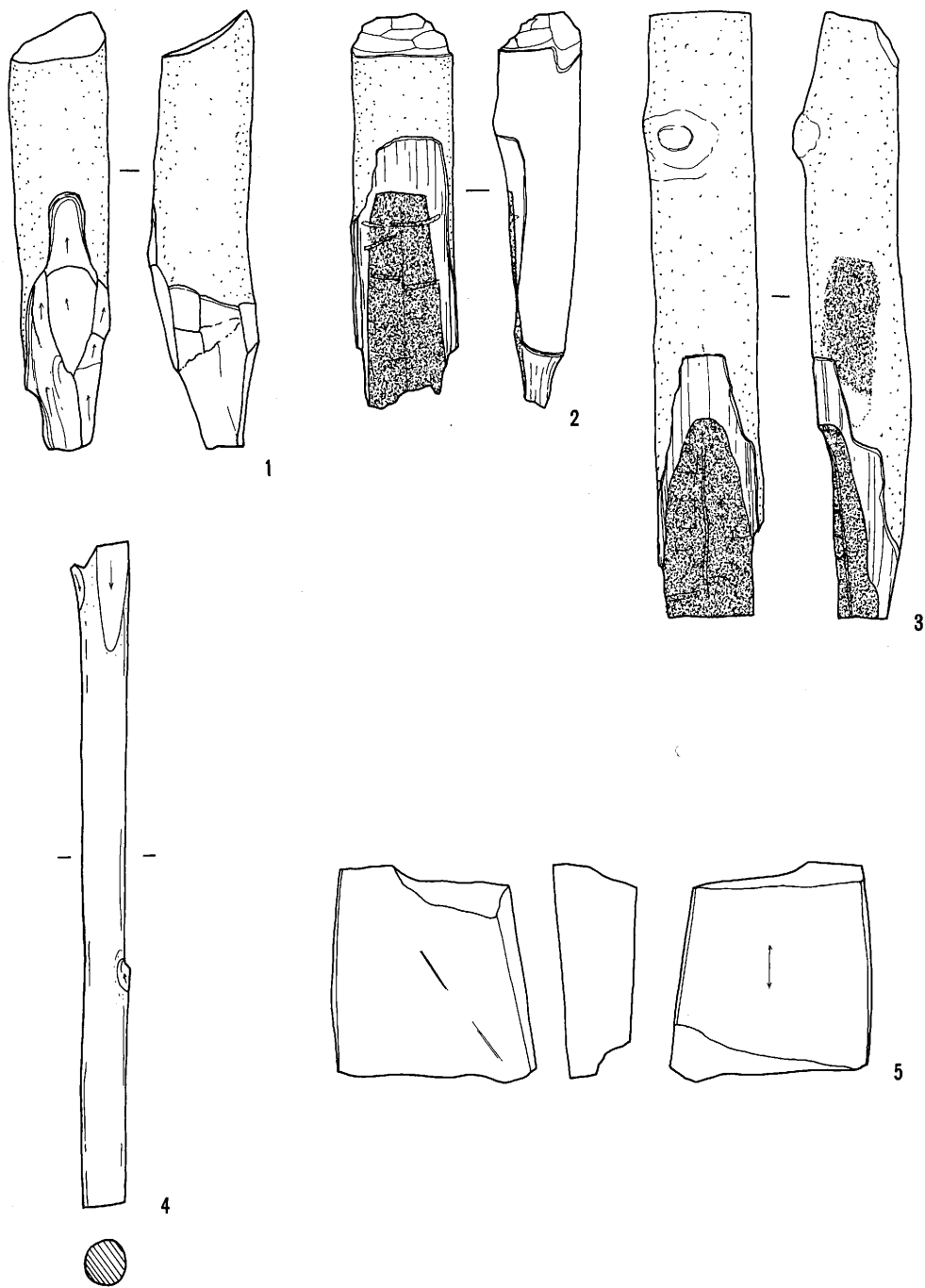
鉄製品はすべて図示した。1は釣手状鉄器である。3・4は角釘であろう。2はリベット状の丸釘で、新しいものかもしれない。5～7は板状品の一部と思われる。8は断面半月形をなす棒状品で、平坦面側に木質が錆着している。

### D 木製品 (第29図1～4)

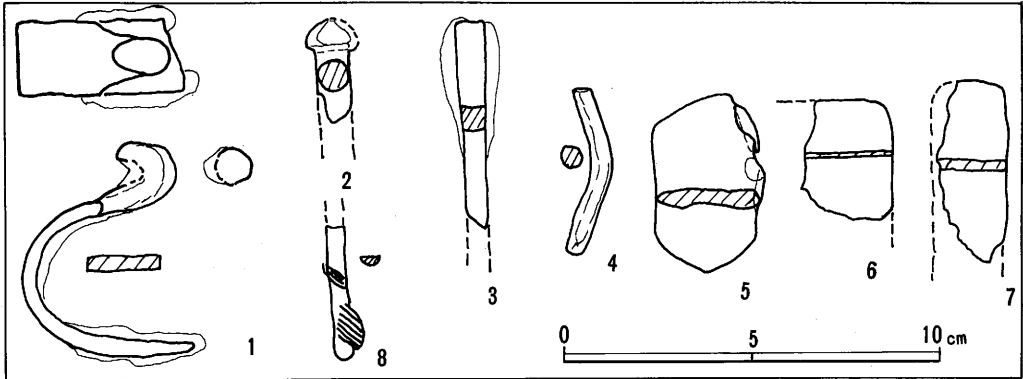
図示したものがすべてであり、いずれも井戸SE5最下層より出土した。1～3は樹皮のついた棒の基部を尖らせ、その基部を焼いたものもある。2以外は破損品である。4は単なる棒で、



第28図 平安時代のフィゴ羽口・鉄滓（1：3）



第29図 平安時代の木製品・石製品 (1 : 2)



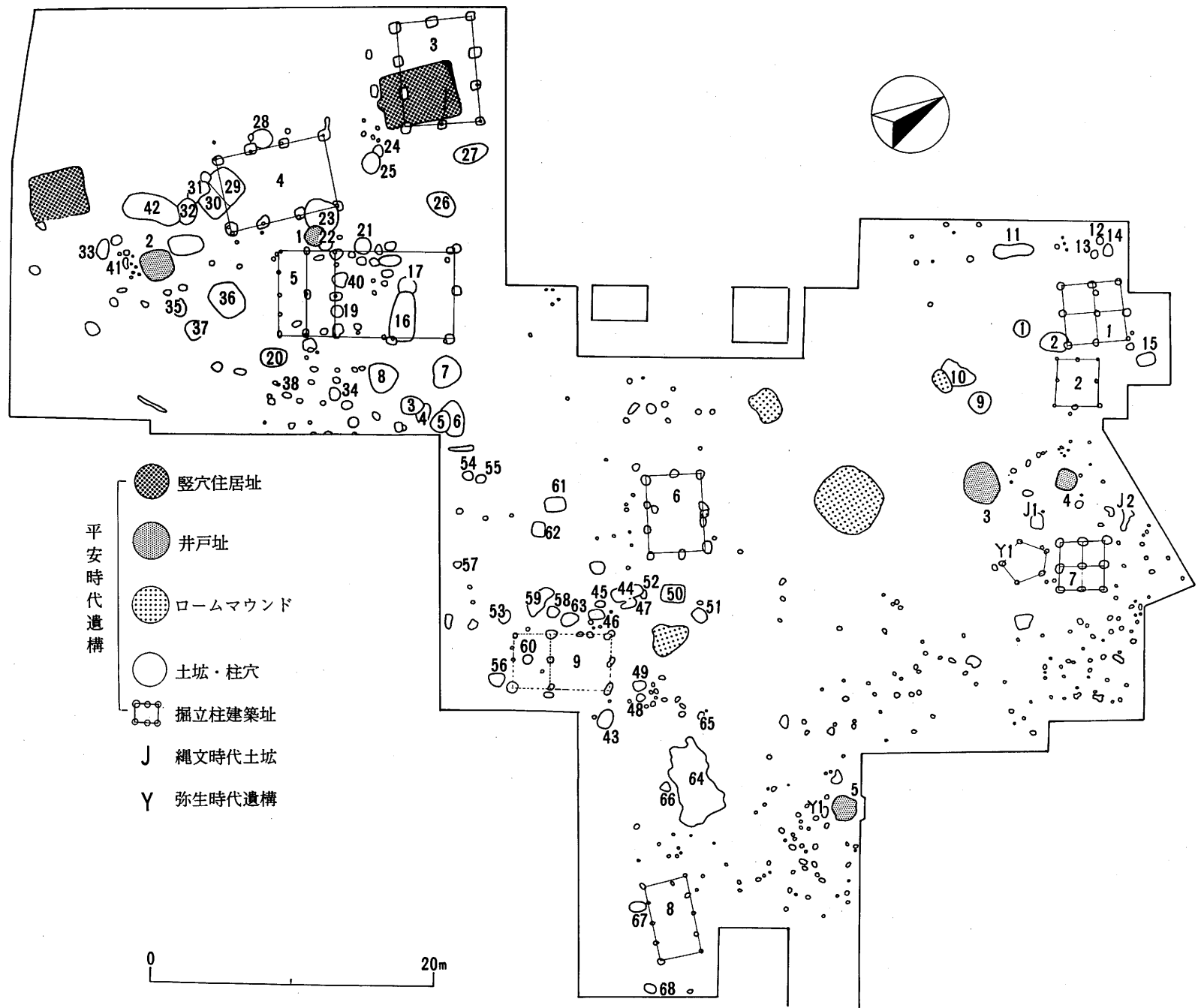
第30図 平安時代の鉄製品（1：2）

1・F 2、2・B 7、3・H 4、4・D 2、5・B 7、6・G 2、7・C 3、8・SK 45

枝を鋭利な刃物で切り取っている。用途は不明である。

**E 石製品**（第29図5）

第29図5はC-6 グリット出土の砥石である。表裏・左右を使用している。仕上砥であろう。



第31図 北原遺跡遺構全体図 (1 : 400)



## 第V章 考察

### 第1節 土坑（鍛冶炉）について

昭和53年の調査及び今次の調査によって、約3000㎡を発掘した。調査区は遺跡の中心地区と思われ、検出された主な遺構は、竪穴住居址2、掘立柱建築址9、井戸址5、土坑約70に達した。時期的には縄文・弥生期の遺構が若干存在するものの、大部分は平安時代に位置づけられる。

北原遺跡を特徴づけるものは、羽口・鉄滓が出土した土坑群である。約70基の土坑で、羽口・鉄滓が出土した遺構は、第3・4・5・6・7・8・16・19・20・21・23・26・27・32・33・34・36・38・40・42・44・53・54・60・64号土坑計25基である。これらの他に焼土・粘土が検出した土坑を加えると50数基に及ぶ。むしろ性格不明の土坑は極く少なく、鍛冶に関係すると思われる土坑が大半である。

古代における鉄生産・加工にかかる遺構は、製錬と鍛錬との間に精錬的な作業を想定し、製鉄・大鍛冶・小鍛冶遺構をそれぞれ考えられている。大鍛冶・小鍛冶の炉においては、「精錬的」なものとは「鍛錬的」なものとの違いはなく、一貫した作業の中で両者が行なわれ、意識的に分けて考えることがなかったらしい。このことから、昭和55年刊行の「北原遺跡調査報告書」ではこれらの土坑群を総称して「鍛冶炉址」群として扱え、大鍛冶・小鍛冶の両者を想定した。

ここで改めて2・3の鍛冶炉について触れておきたい。

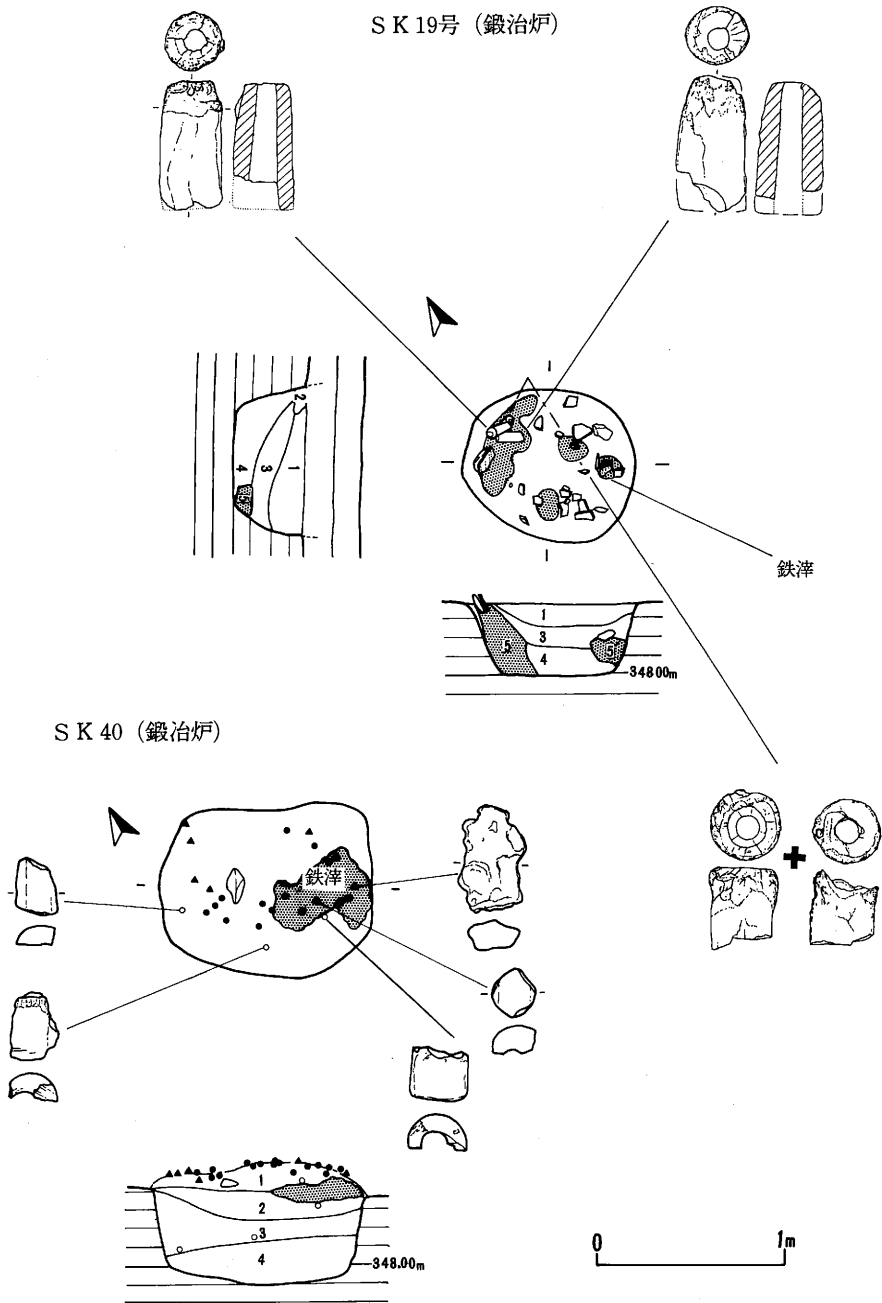
#### 第19号土坑（第31図・SK19）

規模は90×80cm、深さ（確認面から）40cmで、ほぼ円形プランを呈する。坑底・壁とも堅緻であるが、特別に炉壁を構成する施設は認められなかった。覆土は5層に分離され、1層・黒色土層、2層・焼土が混入する黒褐色土層、3層・焼土・粘土が混入する褐色土層、4層・粘土が混入する褐色土層、5層・粘土層である。各層とも人為的埋土で、一挙に埋められたものと推定される。

遺物は土師器・須恵器片とともに、土製羽口・鉄滓が出土している。羽口は上部より3本がまとまって出土し、坑底より1本出土している。坑底より出土した羽口は上部羽口と接合し、完形となるが、中位より破損したのちそれぞれ別個に使用された痕跡が認められた。

#### 第40号土坑（第31図・SK40）

第19号土坑の西1.5mに位置し、間に柱穴が存在する。規模は115×85cmで不整楕円形を



第32図 第19・40号土坑 (鍛冶炉) (1 : 40)



呈する。ほぼ垂直に50cm掘り込まれ、坑底は鍋底状となる。覆土は4層に分かれ、1層・黄褐色土層。鉄滓粒を多く含み、粘土が混入する。2層・暗褐色土層。鉄滓粒を多く含むが、粘土は含まれない。3層・黒褐色土層。4層・黄褐色土層。粘土粒が斑状に混入し、しまりが良い。1・2層の間には鉄滓がブロック状に入る。

遺物は、鉄滓の他に土師器片・羽口片が出土している。

上記の2基は第5号掘立柱建築址内に位置し、間に妻柱を介在させて東西に並ぶようである。

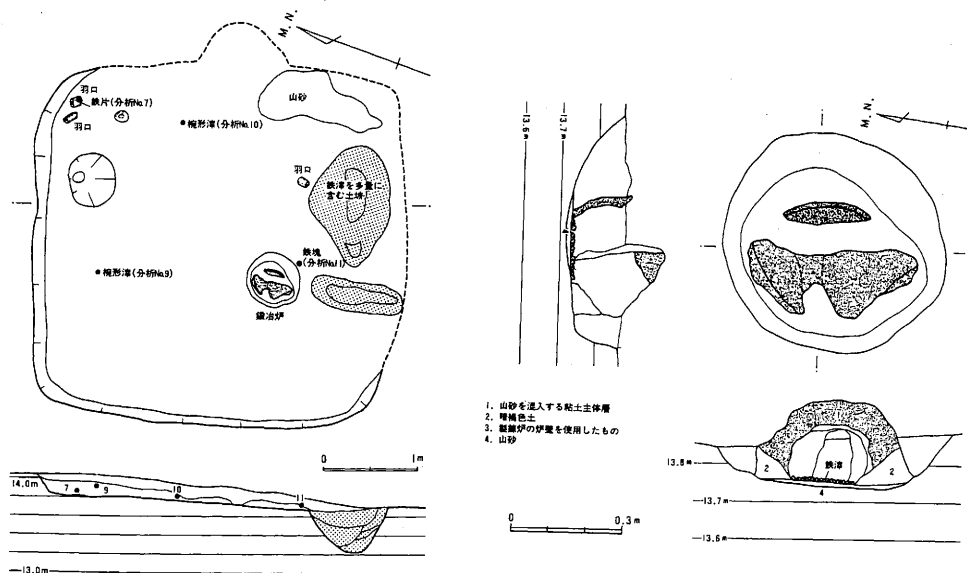
### 第60号土坑（第12図）

今次の調査で検出された遺構であり、詳細は第三章で触れてあるので省略する。63×57cmの楕円形プランを呈し、南壁寄りにピット状を呈す落ち込みがある。

以上の3基は、鍛冶炉と呼称するに相応しい内容を持っている。ただ、炉は明らかに破壊されており、その構造は明確でない。

近年、鍛冶遺構については各地でその存在が明らかにされており、その構造にしても次第に判明してきている。例えば千葉県下においては、ドーム型・開放炉の二者が存在するようであるが、そのほとんどは開放炉であるらしい。唯一ドーム型炉と推定される花前製鉄遺跡（第33図）では、住居址様の遺構内より検出されている。径約60cmで、天井を粘土で覆うドーム状を呈しており、炉壁中央部に約10cmの孔が認められ、羽口の挿入口を推定している。

本遺跡19・40・60号土坑例は、破壊されているため明確ではないが、ドーム型とはなり得ないと思われる。他の遺構についても同様である。また、前に19・40号が掘立柱建築址内に存在する



第33図 千葉県花前製鉄址（千葉県文化財センター1982より）

として若干触れたが、位置のあり方から、同時に存在していたと考えて良いであろう。19号址からは羽口がセットで出土し、椀形滓が1点出土している。40号址からは鉄滓粒がブロックとなり、羽口片が出土している。覆土についても対照的であり、両者が機能的に異なった遺構である可能性が大きい。筆者等は、19号址を鍛冶炉、40号址は19号鍛冶炉の操業に伴う鉄滓溜めの機能を持つ土壇ではないかと考えている。

約50基に及ぶ鍛冶に関係すると考えられる土壇は、すべて鍛冶炉ではないと思われ、各土壇が有機的に関連し合って鍛冶作業を行なったものと思われる。したがって、本来ならば各土壇について分析を行ない各々の機能を明確にしなければならないのであるが、鉄滓の科学分析と併わせて今後の課題としておきたい。

## 第2節 平安時代の土器編年について

平安時代の遺物には、土師器・須恵器・羽口・鉄滓・鉄製品・木製品がある。前回の報文では、特に坏形土器を分類・検討することにより、9世紀後～10世紀に位置づけた。

飯山地方において、平安時代の土器編年については、調査例が少なく資料的にもまとまったものがなかったため触れたことがなかった。ただ近年に至って若干の資料の増加があることから、本遺跡例と比較しながら検討を加えたい。

### 北原遺跡

今次の調査では土師器坏形土器の検出は少なかったが、昭和53年度の調査において出土した坏形土器とあわせて検討する。

坏形土器はすべてロクロ水挽き成形によるものである。

- A類 器高が5cmを超え、内面が黒色処理される。底部の再調整方法によりさらに細分され、手持ちヘラ削りするA-I類、回転ヘラ削りが施されるA-II類の二者がある。体部の断面形は内湾ぎみな器形を呈する。
- B類 A類の小形化したもので、器高3～4.5cm、口径12～13.5cmである。A類と同様に、手持ちヘラ削りするB-I、回転ヘラ削りが施されるB-II類とに細分される。
- C類 A・B類が内湾ぎみな器形をとるのに対し、直線的な器形になる。内面底部は平底となり、体部とは明確に分かれる。底部は回転糸切り痕をとどめる。

以上の坏形土器で主体的に占めるのはA・B類で、C類は客体的に存在する。

### 鍛冶田遺跡（旭町遺跡群・昭和54年調査）

#### 鍛冶田A2号土壇墓

4個体並置されて出土した。底部には回転糸切り痕をとどめ、1例を除き内面に黒色処理が施

される。器形は内湾ぎみである。

#### 鍛冶田C 2号土塚墓

5個体、2・3枚重なって出土したものである。すべて底部に回転糸切り痕をとどめ、内面が黒色処理されるもの2例、されないもの3例である。器形は直線的となる。

#### 長者清水遺跡（飯山市温井・昭和59年調査）<sup>⑤</sup>

##### 第1号住居址

底部および底部周辺にヘラ削り調整を施す例が若干あるものの、内面に黒色処理が施され、底部に回転糸切り痕をとどめる例が主体的である。

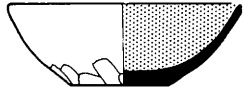
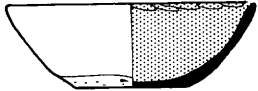
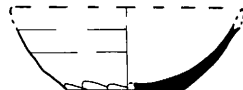
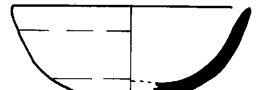
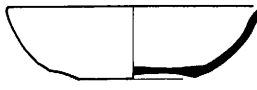
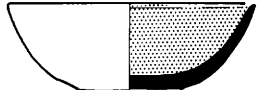
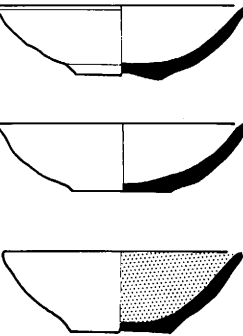
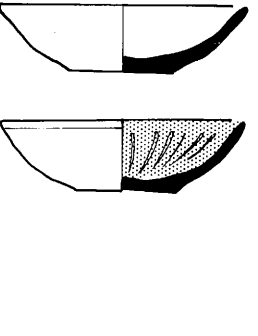
なお、伴出遺物では、北原遺跡より須恵器坏形土器、四耳壺、土師器甕形土器（コの字状・くの字状）等が共伴する。鍛冶田A・C遺跡は、土塚墓という性格上からか、前記以外の遺物はない。ただ、周辺遺構出土土器からも、須恵器の供膳形態は出土していない。長者清水遺跡第1号住居址では、東濃産の灰釉陶器（光ヶ丘1期・大原2期）が共伴するが、やはり須恵器の供膳形態は出土しなかった。

平安時代における土器の細分編年は、須恵器・土師器の形態変化・調整技法等およびセット関係から行なわれる事が多い。さらに、須恵器坏形土器の底部切り離し技法、およびその後の再調整技法による細分編年が行なわれている<sup>⑥</sup>。

すなわち、水挽き須恵器のロクロからの切り離し技法は、回転ヘラ切り、静止糸切り、回転糸切りの三者が存在し、そのまま年代順に並べることができるというものである。さらにそれぞれ細分されるが、特にここで問題とする回転糸切り離し後の再調整については、全面のヘラ削り→外縁部のヘラ削り及び手持ちのヘラ削り→回転糸切りのまま無調整と細分している。この傾向は若干の時間差はあるものの、ほぼ全国的に同様である。回転糸切り後無調整の坏は、東北地方では9世紀後半には出現<sup>⑦</sup>、関東地方では9世紀前半以降出現する<sup>⑧</sup>。ただ、新潟県を含む北陸地方では、須恵器がヘラ切りで、土師器がすでに回転糸切り痕をとどめるという時期があり、若干様相を異にしている<sup>⑨</sup>。

北原遺跡出土須恵器坏形土器は、底部の明確な約30点のうち、静止糸切り痕をとどめるのが1例あるのみで、他はすべて回転糸切り痕をとどめている。したがって、関東・東北地方例にならえば9世紀後半以降と考えられる。ただ土師器坏形土器は、一部に回転糸切り痕をとどめる坏も存在するけれども、回転糸切りの後再調整が施される例が主体的であり、須恵器の技法が広く土師器製作に浸透していない時期と考えられないだろうか。具体的には、9世紀後半～10世紀代に位置づけられるであろう。

次に長者清水遺跡例は、内面黒色で、底部に回転糸切り痕をとどめる例が主体となる点は、より後出的な様相である。これに東濃産光ヶ丘1期・大原2期の灰釉陶器が伴出するが、時期的に

遺跡名	土師器 坏形土器		伴出遺物
北原			(土師器) 甕  (須恵器) 坏・甕・ 四耳壺
長者清水			(土師器) 甕  (灰釉陶器) 皿・碗  (須恵器) 甕
鍛冶田 A			
鍛冶田 C			

第34図 土師器坏形土器 (1:4)

も矛盾せず、10世紀後～11世紀代に位置づけられる。

鍛冶田A-2号土塚墓例は、他に伴出遺物が無いので補強できないが、長者清水遺跡例とほぼ同時期か、若干新しくなろう。

鍛冶田C-2号土塚墓例は、前3遺跡例と比較して、体部が直線的となり形態変化が認められる。また作りも概して荒い。11世紀代以降であろう。

以上、簡単に4遺跡の時期的細分を試みたが、北原遺跡以外は単独に近い出土状況であり、セット関係で把握することが出来なかった。飯山地方では、当期のまとまった資料はまだ少なく、今後資料集成を行なう中で改めて再考する次第である。

### 第3節 北原遺跡の歴史的背景について

本遺跡の位置する飯山盆地が本格的に開拓されていったのは、古代大和朝廷の越・出羽地方開発過程の途上において、その前線の基地となり得た6世紀後半以降であろうと思われる。<sup>⑩</sup>例えば、鬼高期の住居址、祭祀遺構が出土した田草川尻遺跡は、若干の時間的ズレがあるもののそうした背景の中で考慮すべき問題であろう。そうした基盤の中で、それぞれの地域で開拓が行なわれたと思われるが、柳原地区を含む外様平周辺では、本遺跡の時期が示すように9世紀後半から10世紀代以降飛躍的に発展していったものと考えられる。この時期は、丁度荘園制の発達に伴い公地公民制が崩壊する時期と機を一にしている。

時代はやや降るが、『吾妻鏡』の文治二年（1186）3月の条に年貢未納の庄園や牧が記されているが、その中に「<sup>とこいわのまき</sup>常盤牧」も存在している。この常盤牧が長峰丘陵・外様平を中心とする地域であることは、市川文書・諏訪神社文書などで明らかとなっている。

この間約2～300年の時代差があるものの、12世紀の荘園盛行時にそれと逆行する御牧が忽然と表われる事<sup>⑪</sup>はあり得ず、その成立は10世紀代には存在しているものと考えたい。

既に触れてきたように、本遺跡は鍛冶遺構を中心とした平安時代前半（9世紀後半～10世紀）の遺跡である。この鍛冶工房址は、一集落内に於ける鍛冶屋的な類ではなく、専門的集団による工房址と把握でき、これらを形成・統率し得るのはやはりそれなりの領主層を想定しなければならないだろう。第2号井戸址出土の桶底に認められた文字の焼印も、本遺跡が一般的な集落と様相を異にする間接的な材料となりはしないか。ただ、常盤牧との関連となると、直接的に関連づける資料も出土品もなく、やや無理がある。本稿では前述してきたように、常盤牧が成立した地域の一部に本遺跡が存在するという事を記して、関連づけは今後以期したいと思う。

⑧

- ① 高橋一夫 1977「製鉄遺跡」考古資料の見方（遺跡編）
- ② 高橋桂 1980 第Ⅵ章「まとめ」北原遺跡調査報告書所有
- ③ 千葉県文化財センター 1982「研究紀要Ⅶ」
- ④ 飯山市教育委員会 1980「鍛冶田」
- ⑤ 飯山市教育委員会 1985「長者清水・水の沢遺跡」
- ⑥ 高橋一夫 1975「国分期土器の細分・編年試論」埼玉考古第13・14号
- ⑦ 岡田茂弘・桑原滋郎 1974「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査

研究所研究紀要Ⅰ

- ⑧ 坂詰秀一（編） 1971「武蔵新久窯跡」
- ⑨ 坂井秀弥 1982「越後の灰釉陶器」信濃34—4
- ⑩ ただし、弥生時代に開拓が進行したことも事実で、後期に、須多峰遺跡で方形周構墓が検出されている事実は、すでに当地域において首長を中心とした部族国家が形成されていることを示す。

- ⑪ 飯山市教育委員会 1973「飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書」

〃 〃 1978「田草尻遺跡Ⅱ」

- ⑫ この時期（文治2年）に「常盤牧」は年貢未納<sup>とこいわのまき</sup>ということで、すでに「私牧」あるいは「莊園」化しているものと考えられ、すでに「御牧」として機能していなかったと考えて差し支えないであろう。

なお「常盤牧」については、この他に「常岩」、「常葉」等と記載されているが、当時においては「とこいわの牧」とされていたらしい。

## 第Ⅵ章 結 語

138 ヘクタールを対象とする旭地区の圃場整備事業は、昭和48年からじまった。外様平の南部を昭和55年度まで完了させるという大規模な計画であった。昭和52年度の北部整備中には若干の弥生式中期土器片が発見され、圃場整備計画中の水田、畑地に遺跡が埋没している可能性がつかまった。昭和53年度の計画によれば、旭地区北原地籍を中心とする広大な面積が対象とされ、特に北原地籍は旭地区南部の広大な水田を臨む台地上にあり、遺跡の存在する可能性が充分予測された。そこで県文化課の指導によって畑地にあたる部分が発掘調査されることとなった。続いて翌昭和54年度には、鍛冶田地籍が調査の対象となった。これら2遺跡の調査を通じて私達は、弥生式中期の土器及び遺構、平安時代中期、後期の各種の遺構、遺物を検出し飯山地方の弥生式中期及び平安時代中・後期の文化の究明を大きく前進させた。

昭和59年に入り、飯山市教育委員会は「市学校教育基本構想」に基づき西部統小（校名を泉台小学校と決定）の建設地として、北原遺跡の北東部に一部かかる地点を決定した。このため急拠、第2回の調査を行うこととなった。第2回の調査の経過、出土遺構、遺物については前記してある通りである。今回の調査を通じて私達は、弥生式中期の土器及び遺構、平安時代の土師器、鍛冶炉址、建物址等を検出して、今迄に得られた資料の補強をすることができた。

さて、今回の調査をもって、旭地区の工事に伴う発掘調査は一応終了した。今後余程のことがない限り行政発掘は行われまいであろう。従って、ここでは旭地区の発掘調査を通じて得た成果を列挙し、若干のコメントを付して「結語」としよう。

### 1 弥生式中期土器、遺構の検出。

鍛冶田遺跡の調査を通じて、飯山地方における弥生式土器の編年編成が可能となった。

すなわち、小境→鍛冶田D地点→鍛冶田C地点→田草川尻Ⅰ→田草川尻Ⅱという順序で該地方の弥生式土器が変遷していることが判明した。今回得られた弥生式中期の資料は、鍛冶田D地点の土器を補強するであろう。

### 2 平安時代の土塚墓の検出。

鍛冶田A地区2号土塚、C地区3号土塚及び北原遺跡41号土塚。これらの土塚は、形状及び土器の埋置等から明らかに土塚墓として扱ってよいものである。当地方における数少ない平安時代の葬制の一端を示すものとして、重要な意味をもつとともに平安期葬制の研究にも裨益する所が大きい。

### 3 飯山地方における平安時代中・後期の土師器の編年が可能になったこと。

鍛冶田遺跡、本遺跡出土の土師器及び長者清水遺跡出土の土師器を詳細に分析し、更に先進地域における須恵器・灰釉陶器の編年を援用して、当地方における平安時代中・後期の土師器の変遷が次第に鮮明化した。このことについては、考察の項で詳細に述べているのでここでは省略する。

### 4 鍛冶炉址群とそれに伴う遺物（羽口・鉄滓）の検出。

平安期における数少ない生産址遺構として重要な意味をもっているといえよう。明確に鍛冶炉址遺構と推定される土坑は50基に及んでいる。これらの鍛冶炉址遺構は、それぞれ有機的に関連し合って鍛冶作業が行われたと考えられるが、細部にわたる部分は今後の研究課題として残されている。また、鉄滓の分析も本遺跡の鍛冶炉址の性格を知る上に重要なことである。一日も早く専門家によって分析して頂く必要がある。

### 5 建物址が検出されたこと。

発見された建物址が、鍛冶炉址といかなる関連があるのか。詳細に分析する必要がある。恐らく鍛冶炉址の上屋としての建物と、鍛冶の納屋的存在としての建物の二者が存在したことは事実であろう。この内、納屋的存在としての建物址は鍛冶遺構とは比較的距離をおいているので判別は容易であるが、鍛冶炉址を含むような形で存在する建物址をどのように考慮すればいいのか問題となろう。いずれにしても鍛冶炉址と建物址を詳細に検討する必要性に迫られていることは事実である。このことについて、果して鍛冶炉址に上屋が設けられたのかどうかも検討に値するであろう。錯綜とした柱穴列群と鍛冶炉址群との組合せの判断がより強く求められているといえるであろう。

### 6 井戸址と同址出土の木製品。

調査を通じて検出された井戸址は4基である。この内2号井戸址は注目すべき木製品を出土したことで重要である。特に曲物の上板乃至は底板と推定されるものに焼印による文字が施されていることである。この文字は何を意味するのか不明であるが、同じく井戸址出土の「大田？」の墨書土師器を考えると興味深いものがある。なお1・2号井戸址内出土の木製品の用途、樹種等については今後とも追求してゆかねばならないであろう。

2回の発掘調査を通じて得た成果を思いつくままに列挙し、若干のコメントをつけたのであるが、何故このような遺構が豪雪地帯の飯山盆地に平安時代中期に設定されたのであろうか。明確な分析を行っていないため断定できない面もあるが、少なくとも鍛冶集団が作り出した遺構であることは間違いのないであろう。どのような歴史的背景のもとにかかる集団的遺構が構築されるにいたったのか興味津々たるものがあるが、今の所判然としないというのが事実である。

飯山地方の考古学的所見からすれば、古墳時代鬼高期までは人間の活動は比較的スムーズに



認められるが、それ以後やや空白に近い状態となる。そして、再び人間生活が活発に展開されるのは平安時代中半に入ってからである。平安時代の政治的、経済的な動向が豪雪地帯飯山地方の再開拓を促進したものといえるのではなかろうか。このような条件の下で北原遺跡の鍛冶炉址群が構築されるにいたったのではあるまいか。

すでに触れているように外様平を中心として鎌倉期には常岩の牧が存在したとされている。今回明確にされた北原遺跡の鍛冶炉址群が9世紀末から10世紀初頭に存在したという事実を踏まえると常岩の牧が正式に歴史上に登場するのが1186（文治2）年であり、常岩の牧と北原遺跡を直接結びつけるのは、あまりに短絡すぎるであろう。だからといって全く無関係ともいえないであろう。いずれにしても飯山地方古代末期の研究に本遺跡が重要な一石を投じたことは間違いないであろう。今後更に出土遺物の詳細な分析と史料の掘り起しの中で北原遺跡の本質に迫りたいと私達は考えている。

昭和53年にはじまった、旭地区の発掘調査は私達と村人達の結びつきをつよめる上に大いに役立った。私達は、作業に従事していただいた方々から常に種々の面で啓発されることが多大であった。常に発掘現場には笑い声が渦巻いていた。それと同時に遺構、遺物に対する時の真剣な眼差しに私達はしばしば圧倒された。今静かに目を閉じると発掘作業に従事された人々の面影が睨にそっと浮びあがってくる。皆本当にいい人達であった。ある人はもうこの世には存在しない。ある人は病床に伏し、ある人は事情あって音信も不通である。それでもその人達の面影が私達の胸の中から消えないのである。亡くなられた方に対しては御冥福をお祈りし、病床にある方には一日も早く御全快をお祈りする次第である。

いずれにしても旭町地区の発掘調査が無事に終了し得たのは、常に物心両面にわたって御援助頂いた地元選出の市会議員清水一洋、小湊清彦、丸山豊雄の3氏、地元の各区長さん、調査に直接関与された作業員の皆さんの御協力があってこそはじめて可能であったといえましょう。心より改めて感謝申し上げる次第です。

## 引用・参考文献

- 飯山市教育委員会 1973 「飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書」
- 飯山市教育委員会 1978 「田草川尻遺跡Ⅱ」
- 飯山市教育委員会 1979 「北原遺跡」(写真集)
- 飯山市教育委員会 1980 「北原遺跡調査報告書」
- 飯山市教育委員会 1980 「鍛冶田」
- 飯山市教育委員会 1981 「北原遺跡Ⅲ」(分布確認調査報告書)
- 飯山市教育委員会 1985 「長者清水・水の沢遺跡」
- 一志茂樹 1919 「信濃国府の創置とその史的考察」 信濃31—5
- 石沢三郎 1981 「越後の古代交通」 信濃33—11
- 岡田茂弘・桑原滋郎1974 「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」 宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅰ
- 桐原健 1963 「栗林式土器の再検討」 考古学雑誌 49—3
- 坂井秀弥 1982 「越後の灰釉陶器」 信濃34—4
- 坂詰秀一(編) 1971 「武蔵野新久窯跡」
- 笹沢浩 1977 「入門講座・弥生土器—中部高地1～3」 考古学ジャーナル1・3・4月号
- 高橋一夫 1975 「国分期土器の細分・編年試論」 埼玉考古13・14号
- 高橋一夫 1977 「製鉄遺跡」 考古資料の見方(遺跡編)
- 高橋桂 1966 「北信濃須多ヶ峯弥生式墓塚調査略報」 考古学雑誌51—3
- 高橋桂 1969 「北信濃城端遺跡調査略報」 信濃21—10
- 高橋桂・太田文雄 1977 「北信濃須多ヶ峯遺跡第2次発掘調査報告」 信濃29—4
- 千葉県文化財センター 1982 「研究紀要Ⅶ」
- 福岡市教育委員会編 1969 「笹栗古代製鉄遺跡発掘調査報告」

付編

## 発掘参加者の記録



井戸址の発掘風景

## 遺跡発掘に参加して

笹川 大塚 勇

「北原遺跡に出てくれ」と頼まれて、「年配ですし……」と断ってみたが統小の建設予定地との事で出来るだけ協力しようと決めた。

小生、遺跡とお聞きしてもあまり関心が無かったが、53年の時お手伝いして始めて興味が出た。高橋先生、望月現場主任の親切、丁寧な御指導と説明に依って益々理解と興味が湧いて来た。昔の人の苦勞と生活が偲ばれる思いである。

鍛冶群の遺構が主で住居址、井戸址、柱穴址、羽口、鉄滓等、中でも甕棺は完全な形で宝物に値するものと思われる。土器の数々は1000年前の物と聞く、あるいは縄文時代の土器もあるとお聞きした。

今度、統合小学校名も泉台小学校と名付けられる様だ。

その昔、当地に泉一族が支配して居たと高橋先生のお話。

思いが次々と浮かぶ…。

暑い日も寒い日も作業員みんなで楽しく作業出来た事、一番嬉しく思い出される。種々勉強になり先生方、作業員の皆さんいつまでも御元気で「和の郷土」を子孫に伝えましょう。



## 発掘調査に参加して

山口 岸 田 義 元

旭県営ほ場整備が昭和49年に始まったほ場の中に埋蔵文化財があるので昭和52年に北原地籍、53年に鍛冶田又59年に統小の敷地のため発掘した。

北原地籍の作業主任は笹川の大塚勇氏、鍛冶田は私が作業主任を担当した。北原地籍は前回は50日、59年度は30日余り、鍛冶田の時は60日余りかかった。高橋桂団長と市教委の調査員の指示にもとづく作業であった。作業員は25名位で学生のアルバイトも加わり毎日面白い日が続いた。休み時間の艶話し夕方は差し入れの茶碗酒で疲労も忘れる毎日であった。

表土をはぎ、土の色が変わるといよいよ土器のかげら等が見つかり本番の仕事となり時間も忘れて一生懸命に見つける。縄文時代、弥生時代、平安時代と先生に説明して戴き先人の生活様式等目の前に浮んで来るようでした。

幾百個もの出土したものも永久に保存して置く場所（博物館）を是非作って貰いたい。

今までは無関心であった考古学等自然に興味を覚えて来た。

## 遺跡掘りに参加して

笹川 高 柳 唱

文化に成った今と昔。我が心の昔の遺跡に一寸ふれさせてね

富倉峠の道は明治10年に上新田より関屋～富倉～長沢に通じ越後の高田には歩兵58連隊があり、中国の蒋介石も入隊しておりました。

高田へは飯山からこの道を通りました。大正13～14年には中国に帰り主となった人ですが、昭和事変で台湾に送られました。それは、蒋介石は日本で学んだので中国にいられないのでした。この南條北原地を通った大人物ですと。

一口申します。私のようなこの年よりが皆々様と遺跡掘りの仲間にしてもらい、こんなうれしい事はありません。地球を小さな竹ベラで掘ると言う事はよくよく昔の事のように思われ今でも心にのこっています。

私も去年は体を悪くし、皆様に申しわけなく残念でたまりません。

よい心のふれあいと勉強をさせていただきました。

## 北原遺跡掘りの思い出

南条 岸 田 つね子

老人クラブの役員さんからの連絡があり、北原遺跡掘りに参加させて戴きました。

私は家の農作業以外の仕事には、ほとんど出た事がなく心配でしたが、珍しい仕事で興味がありましたので、思い切って参加させて戴きました。

昭和58年10月23日、起工式（鍬入れ式）があり、市役所から浦野教育長さん始め、関係者の方々が多勢見えられました。正行寺の住職さんがお出でになり、玉串をささげ、浄めのお経があげられました。

翌日から作業が開始され、一面の背丈なす草原を刈り払って土掘りの準備が終り、いよいよ表土はぎに入りました。その頃から天候が思わしくなく、小雨の降る毎日でした。冬も間近く、高社山や関田山脈のいただきが雪で真白になりました。

毎日、毎日シャベルで掘った土を、一輪車で運びました。地下70～80cm位、掘り下げて、5mぐらいつのます型に掘りました。

来る日も来る日も小雨の多い日で、シャベルに土がついたり、車輪が土に埋まって田の中を押しているような苦勞をした日もありました。

また天気の良い日は、今日はどんな土器が出るかと、希望にもえて急いで仕事場に向いました。

毎日運んだ土が小山のように高くなってゆきました。

次第に掘ってゆくと赤味を帯びた焼土が出て来ました。

ジョレンできれいにかくと、黒い土の落ち込みが点々とはっきり眼でたしかめられました。これが遺構というものだそうです。

この遺構を手シャベルと竹ベラで掘り下げると、構築物の跡と思われる、柱跡群がたくさん出てきました。倉庫と推定されるとの事でした。落ちこみの跡を掘っていると土器の破片が重なり合って出て来ました。平安中期のおよそ千年前の土器が出はじめて、胸がワクワクときめきました。竹ベラで形をこわさないようにして、そこへ竹の細い棒を立てておくのです。係の人が後から番号をつけて写真を撮り記録に残しました。

雨の日は、掘り出した土器をテントの中で水でよく洗ったこともありました。

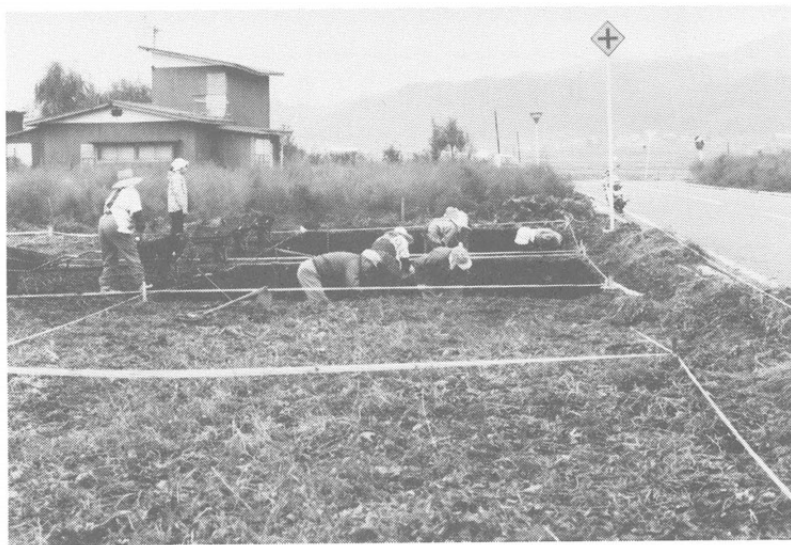
むずかしい事はよくわかりませんが、井戸址、鍛冶炉址、掘立柱建築址等が見つかり、11月21日に終わりました。

最後の日に連絡所で慰労会があり、教育長さん、市議員さん、区長さん、その他団体の役員さん等も来て戴き、盛大に行われ無事に終了いたしました。

私は調査団（高橋先生、望月さん）の方より、皆勤賞を頂き本当に嬉しく思いました。

作業中、高橋先生や望月さんにアイスクリームやジュースを買って戴いた事が忘れられない思い出となりました。

とにかく多勢の皆さんのお陰で、平安中期（千年前）の北原遺跡掘りに参加させて戴いた事は私の人生の1コマとして、忘れ得ない思い出となり感謝いたしております。



## 北原遺跡掘りに参加させて戴いた思い出

山口 岸田 かつ江

昭和58年10月、この年は雨ばかり降って稲もおくれ、取り入れも著しくおくれ寒い年でした。まわりの高い山には時折、雪が降り北原遺跡掘り現場は霜どけの土が重い程足にくっついた。表土はねの時は、63才の私にはちょっぴり苦勞でしたが、仲間と語り合いながら働けるよろこびとやがてこの下から何が出てくるか等と夢と期待で胸をはずませながら張り合いで通いました。

昔のおぢいさんの語り草によるとこの辺は柳の木がいっぱいはえていたので柳原村になったとか聞いた事がありましたが、千年も昔の平安時代にすでに私達の先祖がこの地をひらき、物のとばしい中知恵と工夫をこらして家を建て子孫のために涙ぐましい努力を積まれた事、しみじみ想像します。

いよいよ表土はねもおわって黒々としたおちこみの土が見えてきて、家の柱の跡らしきものが点々と見える場所、又かまどの跡みたいに焼土があつて炭のような物があり、別のところでは粘土土がしきつめた中に黒々とおちこみが見えて土器もいくつか出てきて、感激でした。

その昔、この地をきりひらいて下さった私達の先祖の並々ならぬ御苦勞をしのび、心から敬意を表したいとおもいます。

### 遺跡発掘

南条 小 沢 菊 江

表土を剥ぎ 土器のかげらを見つけると

遠き昔を偲び

今の世に生くるありがたさ

ふと思い

感謝湧く

### 北原遺跡よさようなら

四ツ谷 宮 本 鈴 子

雪に埋れた山にも何時しか黒い肌を見せ、この里にも漸く春が訪れてまいりました。58・59年度発掘を行なった感想文とと言われても、不勉強でなかなか書けない。

一輪車押しで、また何処から土器が出るか、またどんな色なのかもわからず、なかなか慣れない日々でした。10日・20日と過ぎた頃、あちこちから「出た出た」と叫び声が聞こえ、また皆さんとも慣れ、夕日の暮と一緒に俳句などや、歌の声も聞こえ、寒い秋空も忘れ楽しい一日一日でした。

終り頃になり、井戸の跡や柱の穴など次々に珍しい土器なども出て来ましたが、空から白いものが一度二度降ってきたので、せっかく軌道に乗ってきたが、58年度は途中で中止となりました。

59年7月22日から、また開始されました。58年度の秋を思い出し、少しは慣れて石か土器かわかるようになりました。これも、先輩がたのおかげと感謝しております。1000年前もの土器とは私達にはわかりません。58年度より発見が少なく、色々の物は出て来なかった。

暑い真夏の中を一日一日、高橋先生・望月さんの暖い心くばりをいただきありがとうございました。楽しい日々で終わりになりました。

### 発掘調査に参加して

山口 岸 田 しづ子 (熊雄)

○初参加、古代をしのぶ井戸の跡

○中祝に珍歌とびだし笑いぐさ

○たくさんの復元ねがい、幕がおり



## 北原遺跡参加の思い出

山口 岸 田 しづ子 (要佐)

鍛冶田、北町、北原の発掘に参加させて戴き、平素我が家にこもりがちの私にとっては一生の思い出になりました。

親切な調査団の先生方そして多勢の参加者の方々との出会い皆さん優しい、楽しい良い人達ばかりにめぐまれて私は発掘の現場に通うのが楽しみな毎日でした。

縄文・弥生時代、平安時代の土器、井戸の遺構等、古代人の生活様式が大変だった事を知りました。又、真夏の暑さの中で作業の苦しい時、指導員の方の5分休けいも本当にうれしゅうございました。

又、1日中働いて汗いっぱいの身体を、あのすばらしい山の谷間の馬曲温泉にはいらせて戴いたのも思い出の1つです。

本当にお世話様でした。有りがとうございました。



## 遺跡掘り

笹川 宮 本 君 代

「遺跡掘りに出ないか」と声をかけられて私なんかに出来るかなと思いつつ参加させて戴きました。

起工式が終り翌日から参加させて戴きました。

草刈り、表土はぎ、一輪車で土を運ぶ人、スコップで土を掘る人、多勢の人達の力で仕事が進みよいよ遺跡らしきものが？

黒土を掘ったり、けずったりして焼土が出て来た。「ガチャッ」と音がする。「土器かな？」と胸がなる。掘ったり、削ったりして黒いおちこみが出る。そこを移植ゴテで掘る「ガチャッ」と音がする。「これが土器だよ」と望月さんが言われ、やっと出た時のうれしさ、今度は竹ベラで丁寧に掘って赤土が出るまで掘り下げる。大変な仕事です。それでもどうやら皆さんと一緒に出来るような気がして毎日楽しく参加させて戴きました。

人とのふれ合いも出来て楽しく良い思い出になりました。毎日かわら版を出して戴き、本当に良い思い出でした。

今は新しい小学校の建設のため工事も始まり、遺跡の掘った場所も埋められ着々と工事が進んで居るにつけ早く立派な小学校が出来、孫達の登校の出来る日を楽しみに待っているこの頃です。校名も泉台小学校と名付けられて、校名にふさわしい北原遺跡に建つ統合小学校を待ち望んでおります。

○黒土の下の昔の住家見ゆ。

○昔をば語り合いつつ今日も掘る。

## 柳原小学校児童作文集

### 北原いせきの発掘をして

阿部千夏

北原いせきの発掘をして、昔の人はいろいろな物をつかっていたなあと思いました。私が発掘して、でてきたものは現在でいえば、植木ばちのかけらみたいなつぼのかけらでした。

私は、むかしの人がつぼなど自分たちでつくっているすがたを頭の中で考えてみました。せっかく自分でつくったのに、バラバラにわれてもったいないと思いました。

5月に平出いせきを見に行ったことを思い出しました。はく物館の中には、かけらを合わせた大きいつぼがありました。北原いせきのつぼのかけらも、集めて組み立てればこういうつぼになるのかと思いました。

かけらは、小さい小指ぐらいのもあれば、手のひらの半分ぐらいの大きさのもありました。

横には大人の人たちがもうほってある場所がありました。みると、丸い穴があいていたり、土器がおっこっていたり、たいらになったりしていました。こんなに土の中にうめられていたのか、とったりしました。

また、場所をかえて土器を見つけました。



なにか、かたい物がでてきたぞ、土器かなと思ってほって手にとってみると、ただの石ころでした。私は石がでてくると頭にきました。だっていせきだと思ってよくみると石ころだなんてざんねんでなりません。

でも、やっているうちに、そんな気もちは考えなくなり、かえってがんばっていせきをほろうと思うようになりました。

またいつか、できる時があったら、発掘してみたいです。

## 北原いせきの発掘をして

北川裕之

ぼくは、北原いせきの発掘をしていて、いろいろなことがわかりました。そおっとほらなければいけないとか、掘った物は、もらって行ってはいけないとかです。

先生方のはなしをよくきいてそれからはじめました。ぼくはそのとき大きいのも小さいのをいっばいひろうぞと思いました。でもきたいがはずれて、あまりできません。

どこかから

「やったあ。でたあ。」

という声があったので行ってみたら、約3cmぐらいの土器がありました。みんなは、

「すげえ。」

とかいっていました。ぼくもいいなと思ったり、言ったりしました。ぼくは、そこにいけばでてくだろうと思って出た場所をあちこち、ほりました。

5分ぐらいがんばったらやっとこ1こめの、土器が出てきました。かなり大きな土器でした。聞いてみると、つぼのそこだといったので、ぼくはすぐくよこびました。

ともだちも、どんどんほりだしました。2こめも出ました。でもこんどは小さかったです。それからあまりできませんでした。でもこんきよくやったら3つめができました。5cmほどのものです。でもそれいらいでませんでした。ぼくのきたいはずれました。

そしてもう終わってしまいました。また、行きたいです。

## 北原いせきの発掘をして

萩原克志

学校から、一輪車にのって15分ぐらいで、土器がでた所へつきました。先生やおじさんたちの話をきいてから、くわやシャベルで土器をほりました。人のいっばいいる所へ行って、小さいスコップでほっていたら、どこかの人が、

「出た。」

と言ったので、いってみると、茶色っぽい土のかたまりをもっていました。

ぼくもほっていたら、小さい土器らしいものが出てきました。そばにいたおじいさんにきいてみたら、

「土器だな。」

と言ったので、ビニールぶくろのある所へ行ってぶくろのなかに入れました。

ぶくろの中をのぞいて見ると、いっぱい土器が入っていました。

つぎに竹ひごのささっている所へ行ってほっていました。

「休けい。」

と言う声でしたので、テントの所へ行ってジュースをもらってのみました。

また、ほりました。出てこないで、こんどは、一輪車で土をはこびました。土の山で少し休んでいたら、土器みたいのがおちていたから、ひろってきいてみたら、「土器だな。」と言いました。ぼくはうれしかったです。

## 北原いせきの発掘をして

前 沢 歩 美

私は、北原いせきの発掘をして、むかしの人は、いろいろな物をもっていたんだなあと思いました。平出いせきのはくぶつ館へいった時に、つぼは、何種類もあったし、お皿だってたくさんありました。

北原いせきで、1cmぐらいのかけらがみつかったときは、みんな大さわぎでした。

私のところは、ほっても、ほってもなかなか出てきませんでした。出てきても、5mmぐらいのかけらでした。2cmぐらいの出た時は、「やった。」と思ったけど石だったりして、暑い中長そで、長ズボン、ぐんてをして、暑くてイライラしてぜんぜん仕事はかどりませんでした。

休けいをして水をもらった時は、「よし、やるぞ！」と思いました。こうたいでほって、土を一輪車ではこんですてと、なんかいも、なんかいもくりかえしてやりました。

その時、一学年下の女の子が、お皿を見つけたので、「いいなあ。」と思いました。

私も、なんとかしてでも見つけたくて、いっしょうけんめいほりました。でも、さいごまで土器らしい土器は、出てきませんでした。

とてもがっかりしたけど、おもしろかったです。

みつかったのは少しだけど、ぜんぜん見つからないよりましなので、そんなにがっかりしませ

んでした。

とてもおもしろかったので、またやってみたいです。

## 北原いせきの発掘をして

和田 さおり

私たちの学校では、「ふるさと学習」という全校活動があります。こんどは、いせきをほりにいくことになりました。

校長先生のお話をきいてから、班にわかれて、手シャベルでほっていきました。

まえに、平出いせきのかざってある、はくぶつかんにいって、いせきをみにいってきたので、どういのがでてくるかとてもたのしみでした。

でもほっても、ほっても、いせきはでてこなくて、しだいにあきてきました。それでもほっていると、とうとう本当に小さいのができました。そのときは本当にうれしかったです。

そのときはもう、だいたいの人が2こか、3こほりだしていました。私はもっといっぱいほりだしたかったので、また、おなじところをほっていきました。でも、もうその場所にはないのか、ほりかたがへたなのかよくわからないけど、もうでてこないの、そこよりもっとでそうな場所に移りました。

そこでは、だいたいの人があつまっていて、いっぱいほりだしてありました。私は、

「わーすごい、いっぱいあるなあ。」

といってすこしまわりをみていると友だちがきて、

「ねえ、何かみつけた。」

といてきいたので私は、

「3つだよ。」と言っていてまた2人でほりだしました。

けっきょく私は、おわりまで、あと1つか2つしかみつからなくて、数こしか発掘できなくてとてもごんねんでした。それと、おもったより、大きいのがでてきませんでした。

とてもごんねんでした。

# 写真図版



鷹打山より北原遺跡を望む（中央付近）



1. 旭町遺跡群北原遺跡周辺地域航空写真（昭和47年撮影）





2. 遺跡遠景(西より)



3. 遺跡近景(北より)



4. 遺構全体図(南より)



5. 遺構全体図(東より)



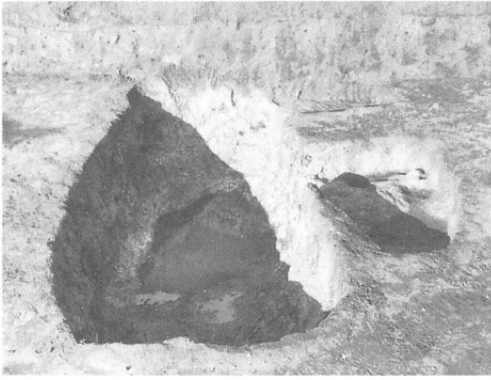
6. 弥生第1号住居址遺物出土狀態



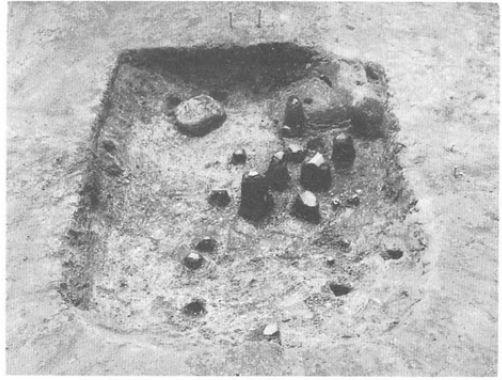
7. 弥生第1号住居址



8. 弥生第1号土坛



9. 第44号土坑



10. 第50号土坑



11. 第53号土坑



12. 第54号土坑



13. 第57号土坑

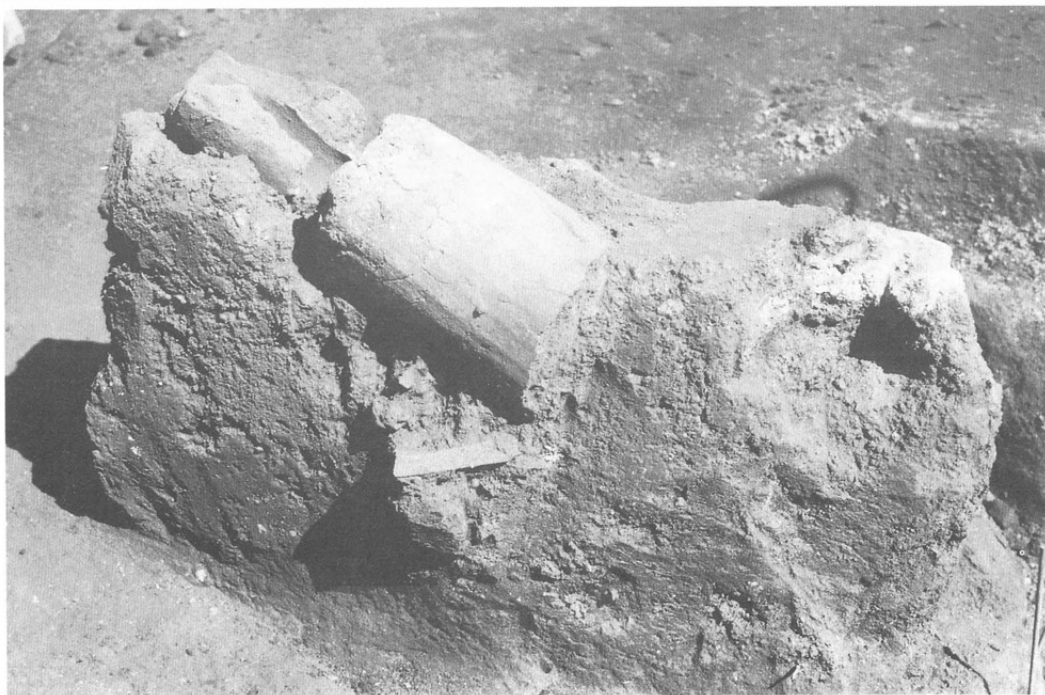


14. 第64号土坑



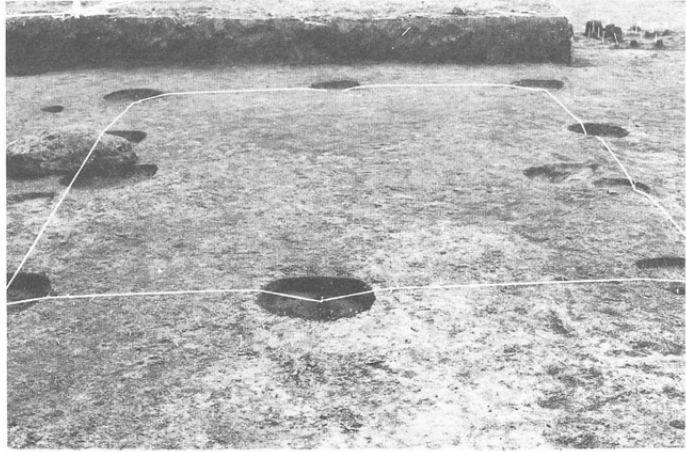


15. 第60号土坑(鍛冶炉)

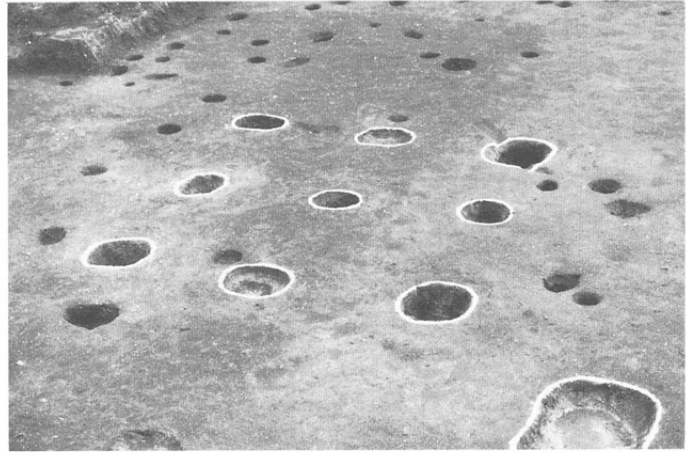


16. 第60号土坑(鍛冶炉)

17. 第6号掘立柱建筑址



18. 第7号掘立柱建筑址



19. 第8号掘立柱建筑址



20. 第3号井戸址



21. 第4号井戸址



22. 第5号井戸址





23. 23-5



24. 23-9



25. 23-14



26. 23-8

(数字は挿図番号に一致)

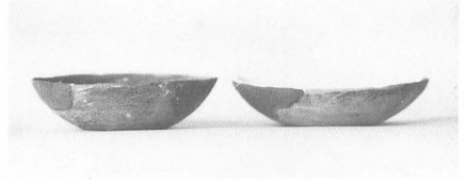


27. 弥生時代の土器





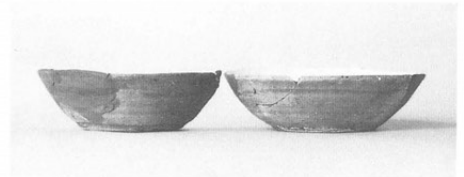
28. 土師器环形土器



29. 土師器环形土器



30. 墨書土器



31. 須恵器环形土器



32. 平安時代の土師器(甕形土器)



33. 平安時代の須恵器

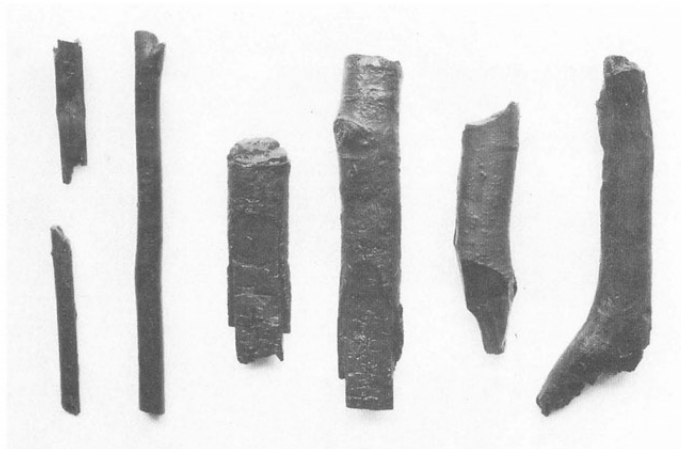


34. 石器



35. フイゴ羽口

36. 木製品



37. 鉄製品



38. 鉄滓



## 飯山市埋蔵文化財調査報告書

- |      |                   |        |
|------|-------------------|--------|
| 第1集  | 飯山市田草川尻遺跡発掘調査報告書  | 1973・2 |
| 第2集  | 宮中遺跡 一分布確認調査報告書一  | 1979・2 |
| 第3集  | 北原遺跡 (写真集)        | 1979・2 |
| 第4集  | 北原遺跡発掘調査報告書       | 1980・6 |
| 第5集  | 鍛冶田               | 1980・6 |
| 第6集  | 北原遺跡Ⅲ (分布確認調査報告書) | 1981・2 |
| 第7集  | 太子林・関沢遺跡          | 1981・3 |
| 第8集  | 田草川尻遺跡Ⅱ           | 1978・2 |
| 第9集  | 田草川尻遺跡Ⅲ           | 1984・1 |
| 第10集 | 北町遺跡              | 1984・2 |
| 第11集 | 長者清水・水の沢遺跡        | 1985・3 |

飯山市埋蔵文化財調査報告 第12集

### 北原遺跡Ⅳ

昭和60年6月10日印刷

昭和60年6月15日発行

編集 飯山市教育委員会

発行 長野県飯山市大字飯山11110～1

印刷 信毎書籍印刷株式会社

